

奈良県御所市

かもつば

鴨都波16次発掘調査報告

—附.平成12・13年度 個人住宅建築に伴う市内遺跡発掘調査—

平成14年(2002年)3月

御 所 市 教 育 委 員 会

例　言

1. 本書は、平成12年度、個人住宅建築に伴う事前発掘調査として国庫及び県費の補助を受けて実施した、鴨都波遺跡第16次調査の調査報告書である。また、同じく個人住宅建築に伴う事前調査として平成12・13年度に実施した、櫛羅遺跡・森脇遺跡の発掘調査成果を附編として掲載する。
2. 鴨都波遺跡第16次調査は、現地調査を、嘱託職員　阪本普通・岡田圭司が担当した。なお、櫛羅遺跡は岡田が主担し、森脇遺跡は、同会技術職員　木許 守が担当した。また、各遺跡調査に際しては、同会技術職員　藤田和尊の協力があった。
3. 調査補助員として、東浦真也（鴨都波遺跡・櫛羅遺跡）、横田明日香（鴨都波遺跡）の参加協力があった。
4. 鴨都波遺跡第16次調査の執筆・編集は、藤田と木許の指導のもと、阪本が行った。また、附編として掲載した2遺跡については、各担当者が執筆した。
5. 遺物整理・報告書作成には、藤村藤子・榎原静代・尾上昌子・中久美子・藤井浩子と、相見梓（奈良大学大学院）、濱慎一（龍谷大学大学院）、東野茂樹・青木美香・横田明日香・森香奈子（関西大学）、廣瀬一郎（龍谷大学）、東浦慎也、刀谷公子が当った。
また、製図は、遺構を阪本が、遺物を藤村が行った。遺物の撮影は相見と阪本が行った。
6. 出土遺物実測図、同図版写真の縮尺は原則として1/3に統一したが、一部、1/4、原寸としたものがある。
7. 出土遺物実測図の断面は、須恵器を黒塗り、その他を網掛で示した。
8. 文中の遺物番号は、挿図・図版中の番号とも全て統一した。
9. 本文中で用いた“北”は、すべて磁北である。

本文目次

鴨都波遺跡第16次調査

第1章 位置と既往の調査	1
第2章 調査の契機と経過	2
第3章 調査の成果	
1. 基本層序	3
2. 遺構	5
第1遺構面	
第2遺構面	
(1) 弥生時代の遺構	
土坑1	5
土坑2	5
溝2	5
(2) 古墳時代の遺構	
溝1	6
住居1	9
土坑3	12
ピット	13
第2遺構面東地区	13
3. 出土遺物	14
4. まとめにかえて	22

櫛羅遺跡第1次調査

1. 調査の契機と経過	31
2. 調査結果	32

森脇遺跡 発掘調査

33

挿図・表目次

鴨都波遺跡16次調査

- 図1 鴨都波遺跡と調査地位置
- 図2 調査地土層断面図
- 図3 第1遺構面平面図
- 図4 第2遺構面西半平面図
- 図5 土坑1 平・断面、遺物出土状況図
- 図6 土坑2 平・断面、遺物出土状況図
- 図7 溝2 断面図
- 図8 溝1 断面図
- 図9 住居1 平・断面、遺物出土状況図
- 図10 住居1竈 平・断面、遺物出土状況図
- 図11 住居1 遺物出土状況図
- 図12 土坑3 断面図
- 図13 土坑1出土遺物
- 図14 土坑2出土遺物
- 図15 溝1出土遺物
- 図16 住居1竈出土遺物
- 図17 住居1 A地点出土遺物(その1)
- 図18 住居1 A地点出土遺物(その2)
- 図19 住居1 A地点出土遺物(その3)・B地点・壁溝出土遺物
- 図20 第2遺構面東地区出土遺物
- 表1 第2遺構面ピット計測表
- 表2 鴨都波遺跡出土遺物観察表

櫛羅遺跡

- 櫛羅遺跡と調査地位置図
- トレンチ配置図
- トレンチ土層断面図

森脇遺跡

- 森脇遺跡と調査地位置

図版目次

鴨都波遺跡16次調査

- 図版1 鴨都波16次 第1遺構面 全景（北から）
鴨都波16次 第2遺構面 全景（北から）
- 図版2 鴨都波16次 土坑1遺物出土状況
鴨都波16次 土坑2遺物出土状況
- 図版3 鴨都波16次 住居1 検出状況
鴨都波16次 住居1 A地点 遺物出土状況
- 図版4 鴨都波16次 住居1 B地点 遺物出土状況
鴨都波16次 溝1 検出状況
- 図版5 鴨都波16次 土坑1出土遺物
鴨都波16次 土坑2出土遺物
- 図版6 鴨都波16次 溝1出土遺物
- 図版7 鴨都波16次 住居1出土遺物（その1）
- 図版8 鴨都波16次 住居1出土遺物（その2）
- 図版9 鴨都波16次 住居1出土遺物（その3）
- 図版10 鴨都波16次 第2遺構面東地区出土遺物

櫛羅遺跡

- 図版11 櫛羅遺跡 調査地全景（南から）
櫛羅遺跡出土遺物

森脇遺跡

- 図版12 森脇遺跡 第1トレンチ
森脇遺跡 第2トレンチ
森脇遺跡 第2トレンチ

鴨都波遺跡 第16次調査

第1章 位置と既往の調査

御所市は奈良盆地の南西部に位置する。西は金剛山・葛城山の峻峰が峙ち、東南部には竜門山地の西端にあたる巨勢山丘陵が、東部には国見山、さらには高取山などが起伏しており、鴨都波遺跡などが所在する市域の北部のみが奈良盆地の平野部(国中)の一角を占めている。

鴨都波遺跡は葛城山麓に源流をもつ柳田川と、南方の金剛山麓に源流をもつ葛城川が形成した河岸段丘上に立地し、南北約500m、東西約450m程度の規模をもつと推定される、弥生時代の大集落として從来から著名であった。

ところが、昭和63年の第7次調査(豊岡1989)では、古墳時代前期から後期の住居址があわせて10棟以上が検出され、平成2年の第12次調査(藤田1992)では、古墳時代後期の井戸やピットなどが検出された。さらに、平成12年の第15次調査では、豊富な副葬品が出土した鴨都波1号

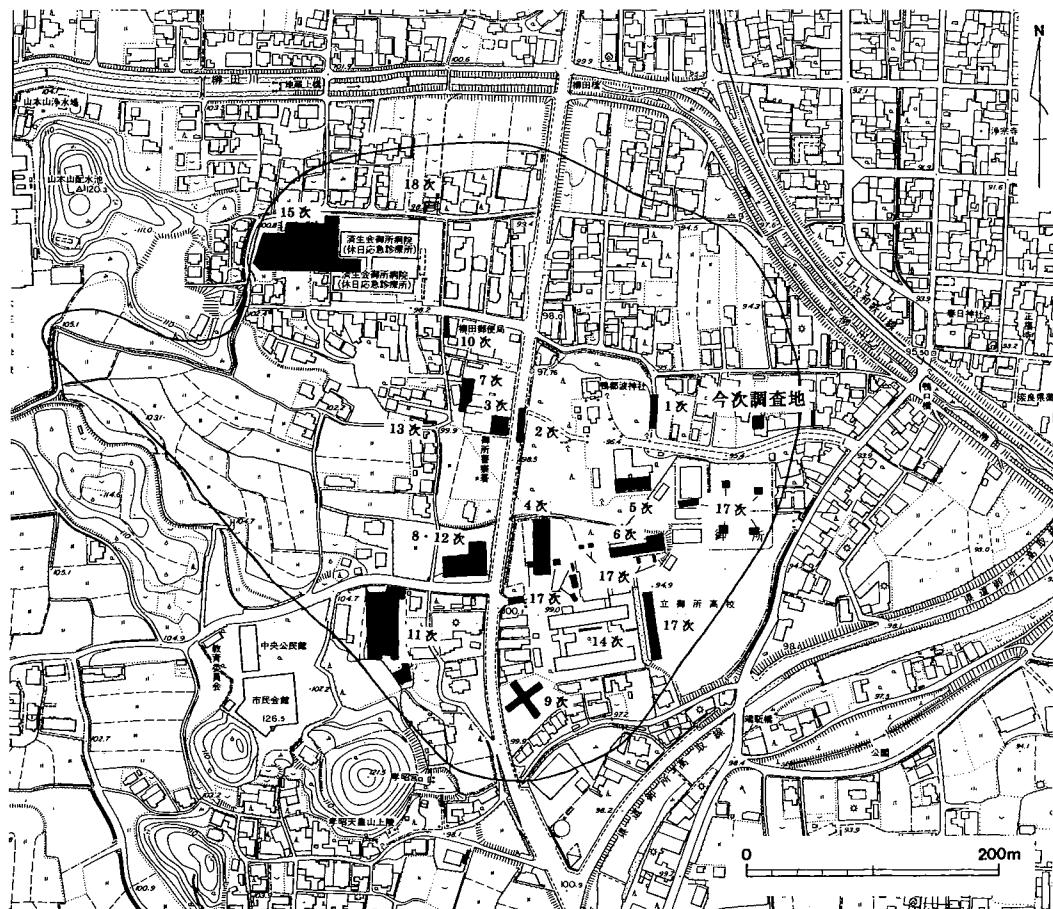


図1 鴨都波遺跡と調査地位置(S. =1/6000)

墳（藤田・木許 2001）などの古墳や木棺墓のほか、古墳時代に属する土坑、溝、ピットなど、多くの遺構が検出され、第15次調査地およびその周辺が、弥生時代から古墳時代の墓域であることが判明した。また、後述するように、今次調査の内容をあわせて考えれば、鴨都波遺跡では、古墳時代後期においても、居住域はある程度の広がりがあったとみられる。

このように、鴨都波遺跡は弥生時代の集落としてだけではなく、古墳時代の集落としての側面も明らかになりつつある。なお、従前の調査の概略については『鴨都波1号墳 調査概報』（藤田・木許 2001）などを参照されたい。

第2章 調査の契機と経過

平成12年10月27日、御所市宮前町509番地について個人住宅建築を目的とした発掘届（文化財保護法第57条の2に基づく）が提出された。当該地は鴨都波遺跡（『奈良県遺跡地図』第3分冊「16-B-42」）として周知されている。また、このたびの工事内容は既設建物撤去後、新築工事を行うものであるが、建物建設範囲内に地盤改良工事とそれに伴う掘削を行うものである。そのため、事前に発掘調査が必要であると判断されることから、当市教育委員会は、これを奈良県教育委員会文化財保存課に進達し、併せて発掘調査通知（同法第58条の2に基づく）を提出した。

調査は、建物建設部分についてのみ、地表から遺構面までを重機によって掘削し、遺構面については人力で掘削・遺構埋土除去を行った。その結果、2面の遺構面を確認し、上層の遺構面を第1遺構面、下層の遺構面を第2遺構面とした。第1遺構面では中世の遺構を、第2遺構面では、同一面で、弥生から古墳時代に至る遺構を検出した。

調査、実測にあたっての基準線は、調査地の形状にあわせて、東西方向に基準杭を打ち、それとともに1m四方の方眼を設定した。遺構面での調査面積は約85m²であった。

発掘調査は、上記の手順で順次進めたが、第1遺構面調査段階で、調査地西半において、下層の状況を確認する目的で重機によるトレント掘削を行った。トレントは第1遺構面の遺構を避けて設定したのだが、このことが結果的に第2遺構面の住居1の北西隅を破壊することになってしまった。

また、第2遺構面の調査時には湧水量が多く、側溝を巡らせたものの、遺構の検出が十分にできる状態ではなかった。特に、東半については遺構の精査を断念せざるをえない状態であった。結局、東半については、掘り下げ時の出土遺物は、出土位置を記録して回収するにとどまった。この部分を「第2遺構面東地区」と呼称して出土遺物等について報告する。

このほか、今回工事における地盤改良のための掘削が現地表下3.2mまでに及ぶものであったが、工事日程やその他の制約のために、遺憾ながら、第2遺構面より下位は調査を行うことができなかつた。

現地調査は平成12年11月21日から同年12月16日まで行い、実働19日間であった。

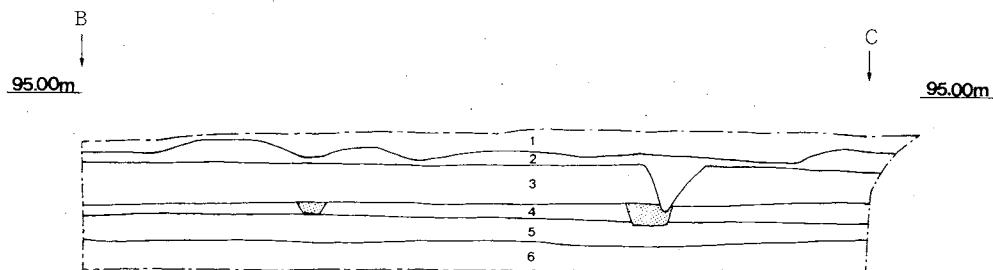
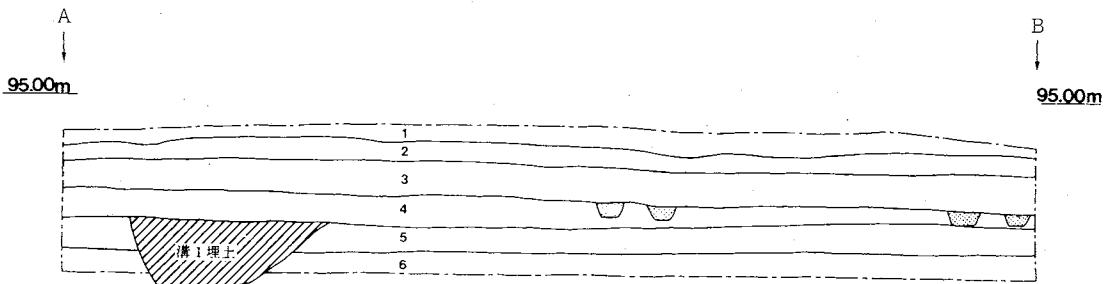
第3章 調査の成果

1. 基本層序

調査地は、表土(1層)直下に旧耕作土である青灰色砂質土(2層)がみられ、その下には灰褐色砂質土(3層)がみられた。これらには遺物は含まれていなかった。

3層の直下、地表下約0.8mが第1遺構面となり、暗灰褐色砂質土(4層)がみられた。東側は20cmほど下がっているが、これは削平によるものであろう。4層直下、地表下約1mに、第2遺構面として暗褐色礫砂土(5層)を検出した。そして、第1・2遺構面のそれぞれベースとなる4・5層は遺物包含層であり、濃密に遺物を含んでいた。

5層より下層は平面的調査を行うことができなかつたが、側溝を兼ねたトレンチでは、暗褐色砂質土(6層)を確認した。この層にも遺物を多く含んでおり、さらに下層にも遺構の存在が予想される。



- | | |
|-----------|------------|
| 1. 表土 | 4. 暗灰褐色砂質土 |
| 2. 青灰色砂質土 | 5. 暗褐色砂質土 |
| 3. 灰褐色砂質土 | 6. 暗灰色砂質土 |

図2 調査地土層断面図(S. =1/80)

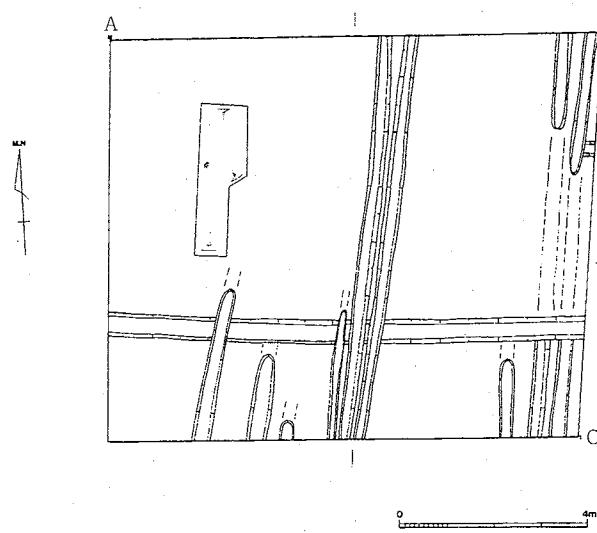


図3 第1遺構面平面図(S. = 1/160)

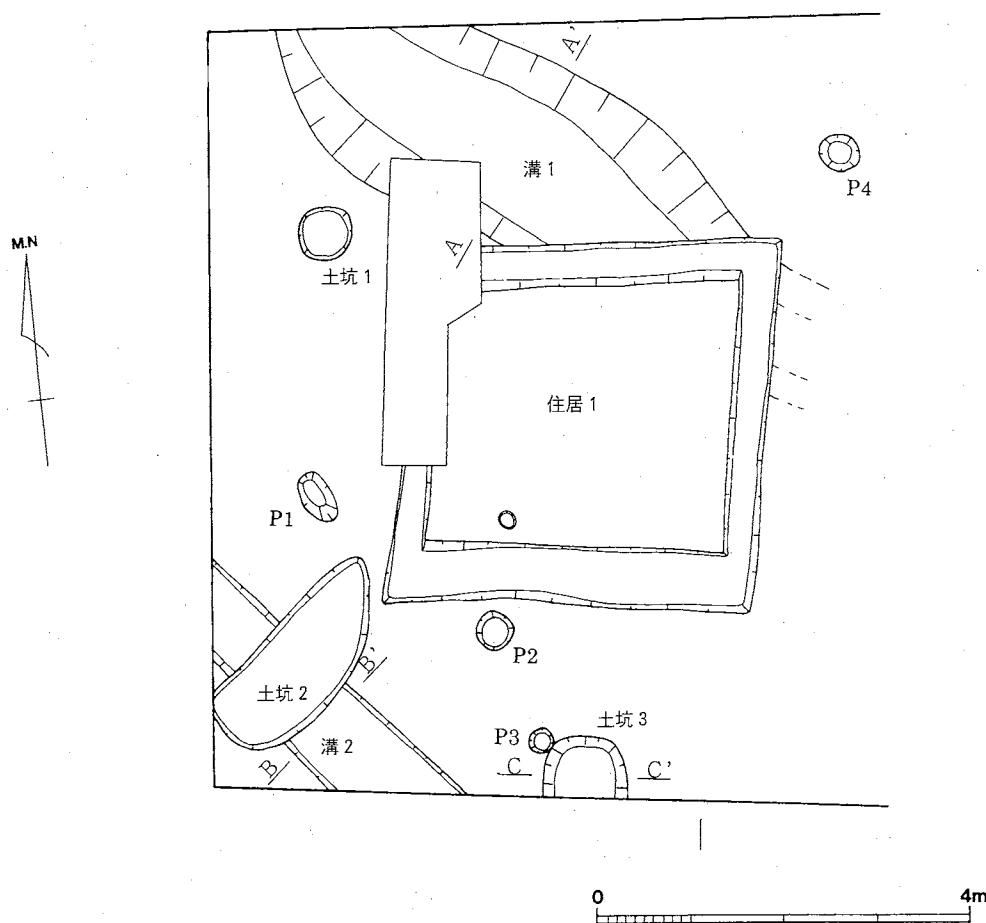


図4 第2遺構面西半平面図(S. = 1/80)

2. 遺構

第1遺構面（図3）

第1遺構面では、南北方向に9条、東西方向に2条の素掘溝を検出した。幅はおよそ20cmから50cmである。深さは一定しておらず、10cmから25cmほどであった。東西方向の溝については南北方向のものにくらべて、幅が広く、深く掘られている。第1遺構面で検出した遺構は素掘溝のみである。埋土は灰褐色粘質土か灰色粘質土かの单一埋土である。その埋土中からは瓦器片が出土した。したがって、第1遺構面の素掘溝形成時期も中世に求められるだろう。しかし、いずれも細片であったため、詳しい時期の特定にまでは至らなかった。

第2遺構面（図4）

（1）弥生時代の遺構

土坑1

調査地北西で検出した、径約0.6m、深さ10cmの円形の土坑である。埋土は暗灰色粘質土である。底に接して、畿内第V様式（佐原1968、以下、弥生土器編年について同書による）に位置付けられる高杯1点（13-1）が出土した。

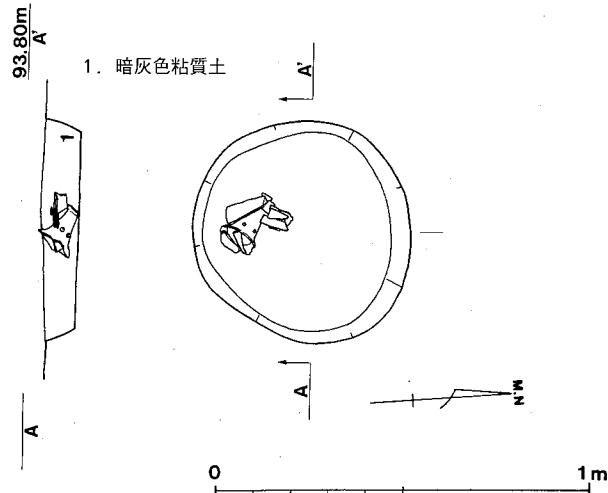


図5 土坑1 平・断面、遺物出土状況図(S. =1/20)

土坑2

調査地南西隅で検出した。規模は長径2.3m、短径1m、深さ15cmを測る。埋土は暗青灰色粘質土である。弥生土器広口壺（14-1）やサヌカイト剥片・土器小片が、底からはやや浮いた状態で出土した。広口壺はその特徴から畿内第V様式に位置付けられる。

溝2

調査地南西隅で検出した、北西から南東方向へと続く溝である。長さ3.6m、幅0.9m、深さ10cmを検出した。土坑2に切られている。

出土遺物は細片であったため時期不詳であるが、遺構は、土坑2との切り合い関係から弥生後期以前に形成されたと考えられる。

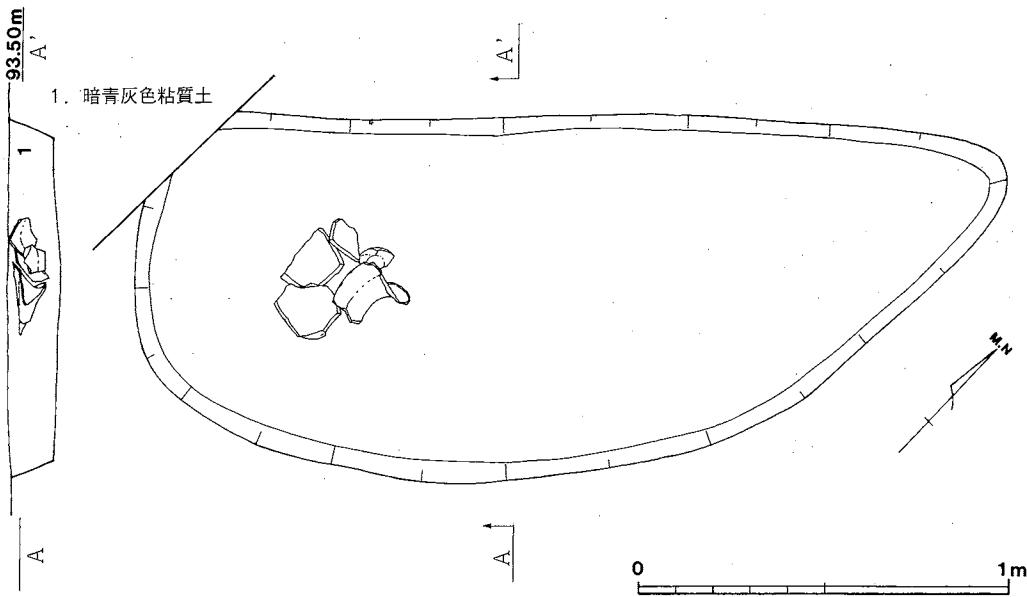


図6 土坑2 平・断面、遺物出土状況図(S. =1/20)

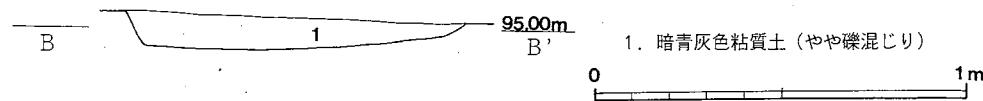


図7 溝2 断面図(S. =1/20)

(2) 古墳時代の遺構

溝1

調査地北側で検出した、北西から南東へと続く溝である。遺構の東半部は、「第2遺構面東地区」にあたり、「調査の契機と経過」に記したように、検出できなかった。西半部では幅約2.1m、深さ0.6m、長さ3.9mを検出した。

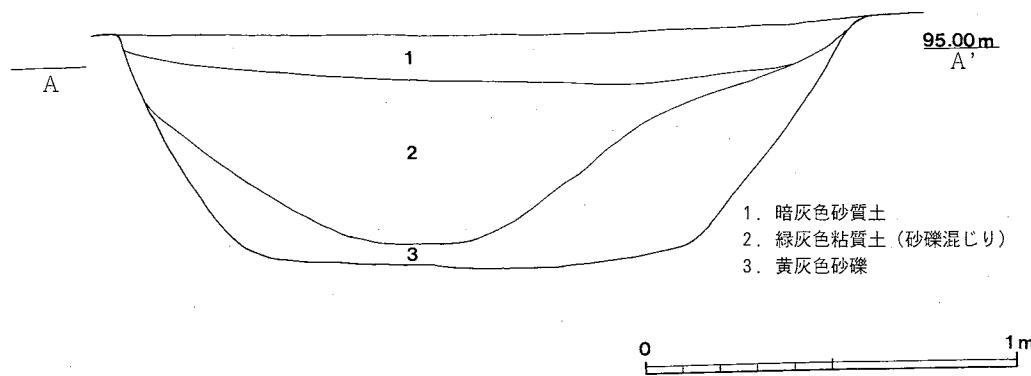


図8 溝1 断面図(S. =1/20)

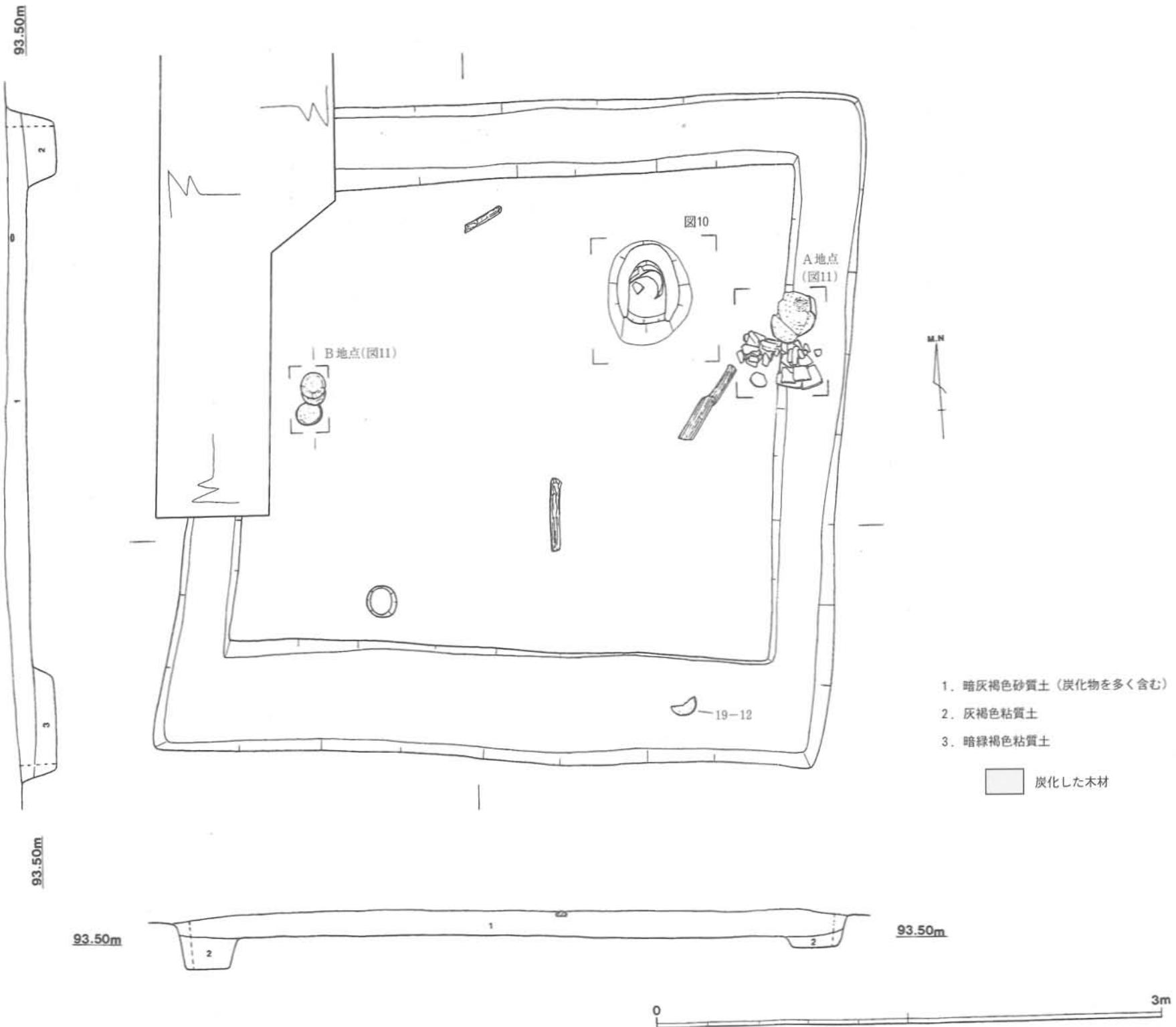


図9 住居1 平・断面、遺物出土状況図(S. = 1/30)

埋土は3層に分層することができ、遺物は2層および3層に含まれていた。出土土器はやや大きい破片を含むが、ほとんどは小片である。総量はコンテナ2箱になった。このうち、図15に13個体を掲載した。出土量は2層が多い。3層出土遺物は、図示したものでは(15-4)・(15-11)の2個体だけであった。出土遺物は弥生土器・庄内式土器・布留式土器など多様であったが、2層と3層の出土土器に時期差を見出すことはできなかった。

溝1の形成時期は、布留3式(寺沢1986、以下、古式土師器の編年は同書による)より新しい土器がみられないことから、古墳時代前期頃とみられる。なお、溝1埋没後にその埋土を切って、後述する古墳時代後期の住居1が構築されている。

住居1

第2遺構面中央で検出した、方形プランの竪穴住居で、焼失住居である。「調査の契機と経過」で記したように、住居1北西部は、第1遺構面で設定したトレンチによって破壊してしまったため、その部分のコーナーを検出できなかった。

床面直上の埋土には、火をうけた屋根材・柱材等と考えられる炭化物・炭化材が多量に含まれていたことから、住居1は、焼失住居とみられる。炭化物の遺存状態は、総じてあまりよくなかったが、図9には、それらのうちでも比較的良好な遺存状態であった、元は建築材とみられる炭化物を網掛で示した。

住居の規模は一辺約3.9mを測る。住居の周囲には幅30~60cmの壁溝が完周している。壁溝埋土からは土師器高杯(19-12)の杯部が出土した。検出した遺構の深さは、住居床面で約10cm程度、壁溝の底で約20cmであった。床面には置土などの施設はなかった。柱穴は南東隅で1基を検出し得たのみで、その他については判然としない。また、壁溝には、本来板材等を用いた壁があつたと考えられるが、現場ではその痕跡を平・断面においても見出すことができなかった。想定しうる層離線を図9中の土層断面図に破線で示した。

住居北東には竈を設置しているが、通有のように壁に沿って設置されていない。

竈は、まず、住居床面に長径61cm、短径50cm、深さ8cm程度の、楕円形の浅い土坑を掘り、その外周に沿って土坑の内側に幅約15cmの壁体を構築している。壁体は暗灰褐色粘土を使っている。壁体の上部は、倒れた柱材が当たったことや削平を受けていることから崩壊しており、その構造は不明な部分が多い。住居床面のレベルより上位は、南方向に幅約22cmの焚口を設け、残る3方を馬蹄形状に粘土を積み上げているようである。なお、図10の竈断面図で、竈内の土器より壁体の粘土の方が約12cm低くなっているのは、本来遺存した粘土壁体の上部が湧水の影響を受け現状を留めていなかつたためである。つまり、住居倒壊後の削平は、竈内の土器のレベルまで及んでいたものである。

竈内からは土師器甌(16-1)と同高杯(16-2)が出土した。甌は竈のほぼ中央で、倒立した状態で検出した。口縁部と底部を欠いており、全体の1/2以下の破片になっていた。高杯は、杯

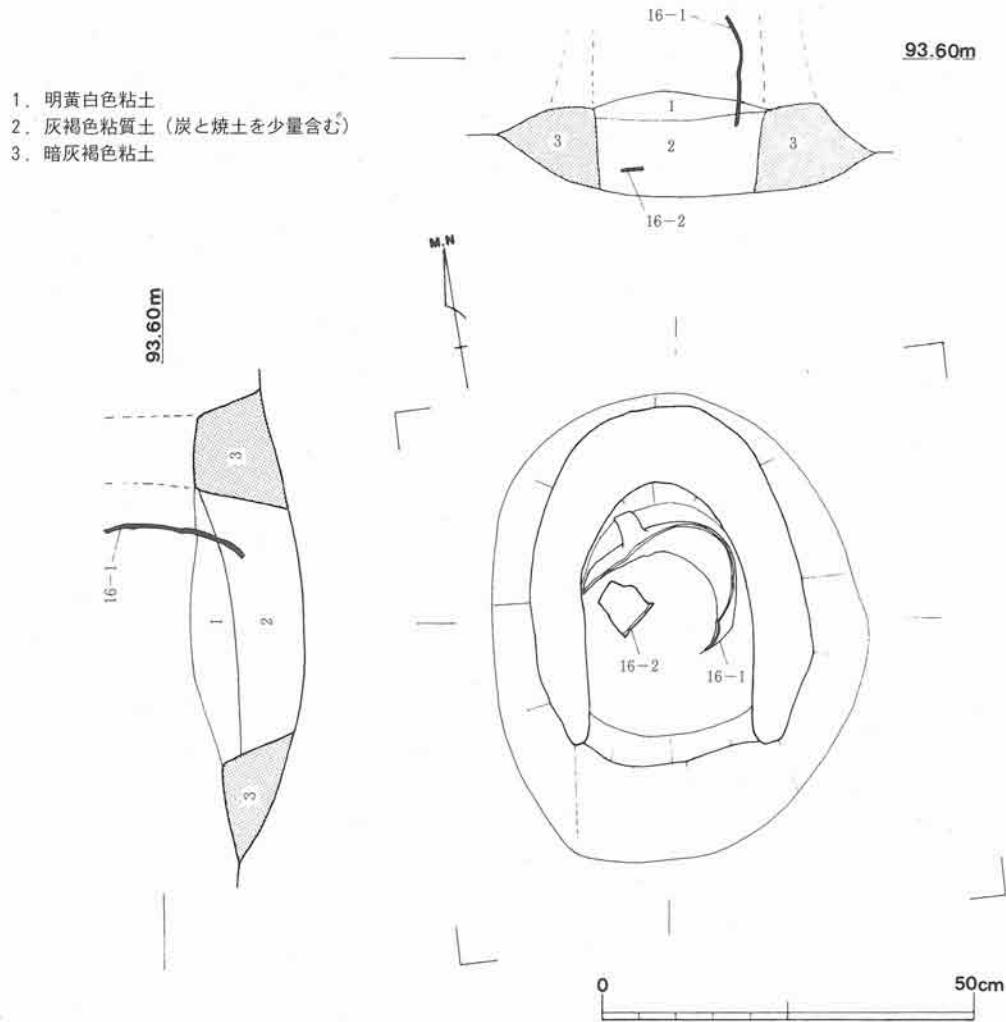


図10 住居1竈 平・断面、遺物出土状況図(S. =1/10)

部の1/8程度の破片が竈埋土に含まれていたものである。また、壁体粘土内には、偶然混じったものであろうが、土師器甕片(16-3)、須恵器無蓋高杯片(16-4)、製塩土器片が含まれていた。

竈内から出土した甕は、その出土状態を一見すれば、支脚として用いられたとも思える。しかし、土器の表面を観察すると二次的な火熱をうけていないこと、図10の出土状態の断面図に示したようにこの土器が竈の底に接していないことなどの理由から、住居倒壊時などに竈内に落ち込み、また、削平によって破片が飛散してしまったと考えるのが妥当であろう。前記の高杯が竈内から出土したのも同様の経緯と考えられよう。

また、この竈から南東60cmの位置(以下、A地点と呼称)で、土師器甕(図17-1)と同長胴甕(18-2)および土師器甕3個体(19-3~5)、須恵器杯身(19-6)が一群で出土した。

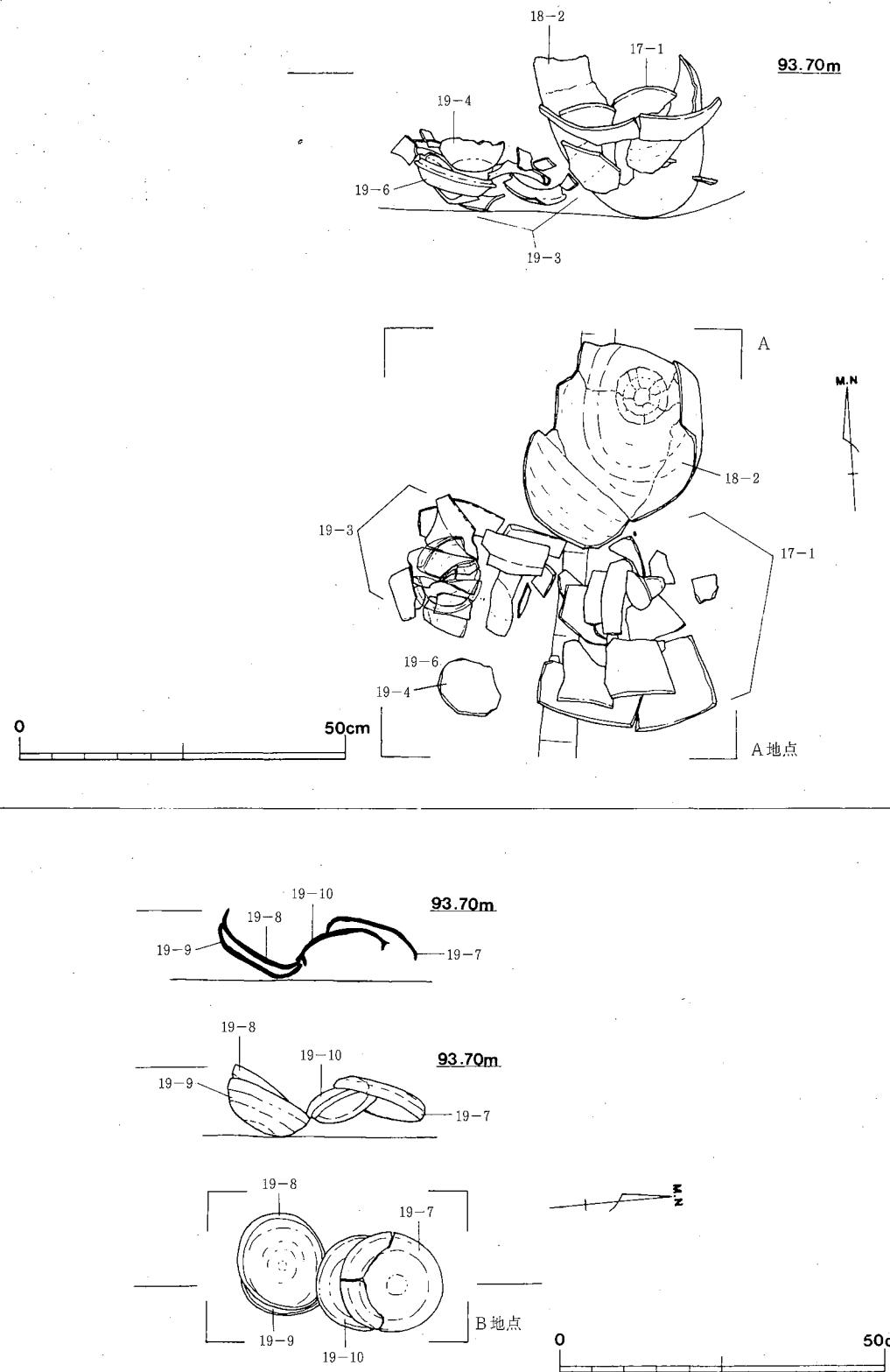


図 11 住居 1 遺物出土状況図(上段は A 地点、下段は B 地点)(赤刷は下位の土器)(S. = 1/10)

なお、甕のうち（19-5）は、小片であったために平面図で示し得なかったが、長胴甕（18-2）のごく近辺にあった。そして、これら一群の土器はいずれも正置された状態で出土したものである。

住居内の西端近く（以下、B地点と呼称）の床面上では、須恵器杯蓋3（19-7～9）、同杯身1（19-10）が重ね置かれた状態で検出された。なお、杯身（19-11）は、出土状態図を作成する前に誤って取り上げてしまったのだが、これらの付近にあったものである。

これらの土器はいずれも住居1の床面上にあり、住居焼失時の炭化物を被っていたので、ほぼ原位置を保っていると考えられる。

住居内の土器の出土状況を以下にまとめる。A地点には、甕と長胴甕、それぞれ1個体が置かれていたが、竈内にも別個体の甕の破片がみられた。このことは調理する素材によって2つの甕が使い分けされたことを示唆すると共に、うち一方は婚姻などによって外部から持ち込まれた可能性も考慮する必要がある。また、A地点にはこの他に、2次的な火熱を受けた3個体の甕があった。さきの甕・甕のセットと共に、これらの土器はいずれも、加熱を伴う調理に用いる土器であることから、これも、調理する素材によって土器の使い分けがなされていたことを示している。

他方、B地点には、原位置を動いてしまった杯身1個を含め、杯身2個と杯蓋3個が置いてあり、A地点の杯身1個をあわせると、住居1からは、いわゆる供膳具として杯身と杯蓋がそれぞれ3個ずつ出土した。A地点の杯身は、本来、住居西端にまとめて置かれていたのであろうが、たまたま竈付近に置かれた時に火災にあったものだとみられる。

つまり、住居1東端の竈付近に甕、甕をはじめとした火熱を伴う調理具、西端には須恵器杯の供膳具が置かれていたことになる。調理具と供膳具が別々に置かれていたことは、住居内の空間利用を考える材料となるだろう。また、小形の甕の数と杯セットの数が3個体ずつと合致することは、この住居に居住した人数を推測する材料となるであろう。

なお、B地点を中心に出土した杯の3セットは、蓋と身いずれの組み合わせにおいてもしっくりと合わない。蓋と身は別々に数次の機会にわたって入手されたらしい。

住居1の形成時期については、A・B地点で出土した須恵器杯が、TK 209型式（田辺1966、以下須恵器型式については同書による）に比定できることから、当該期に求められるだろう。

土坑3

調査地南端で検出した隅丸方形の土坑である。南端は調査地外に続く。東西90cm、南北64cm、深さ40cmを検出した。出土遺物は土師器細片があった。時期は不詳であるが、古墳時代以降とみられる。

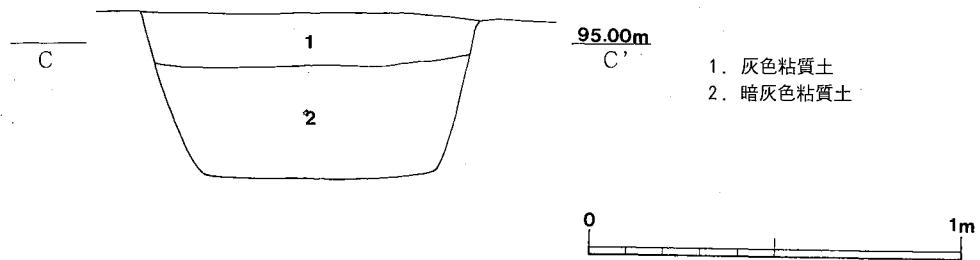


図12 土坑3 断面図(S. =1/20)

ピット

ピットは4基を検出した。いずれも埋土は暗褐色粘質土の1層で、柱痕跡は確認できなかった。ピットの詳しい形成時期は不明であるが、P 4からは古墳時代の須恵器片が出土した。ピットの法量等は以下の表にまとめる。

番号	長径	短径	深さ	遺物
P 1	60cm	30cm	9cm	土師器片(3)
P 2	40cm	40cm	23cm	なし
P 3	25cm	25cm	9cm	なし
P 4	45cm	35cm	5cm	須恵器短脚高杯(1)、土師器片(15)

表1 第2遺構面ピット計測表

第2遺構面東地区

第2遺構面東地区は、第2章「調査の契機と経過」で記した理由などにより、精査を断念せざるを得なかった。

調査地の西半で検出した第2遺構面のレベルから比較的浅い位置で、弥生土器や庄内式土器、布留式土器、初期須恵器などが出土した。出土地点は、図示した(20-5・6)のほか数点は北半から出土したが、ほとんどは第2遺構面東地区の南東部で出土した。そのうち(20-1~4)の4個体を図示しているが、全体量はコンテナにして2箱分ほどであった。

甕(20-1・3)は完形で出土した。これらは、第2遺構面西半で検出した溝1出土の布留式土器と時期的に近いものである。溝1はその東半を検出できていないが、本来は調査地の北西から南東へ続いていたとみられる。このような状況から、(20-1~4)をはじめとして、南東部から出土したに土器については、本来は、検出できなかった溝1の東側部分の埋土中に含まれていた土器である可能性が高い。

須恵器(20-5・6)については、北半から出土した。これらは、溝1とは関係なく、古墳時代の別の遺構が第2遺構面に存在していたものとみられる。

3. 出土遺物

出土遺物の詳細は観察表に記した。以下には特徴的なことがらについて述べる。

土坑1（図13）

高杯（13-1）は、口縁部の長さは短く、その外傾度は小さく、直立に近い。脚部の形態は、やや太い基部から緩やかに広がって脚端近くで急に短く開く。これらは、畿内第V様式のなかでも、古相の特徴を示している。ただし、調整手法には、全面にヘラミガキを施している。このことは新相の特徴を示し、必ずしも形態の特徴とは一致しない。畿内第V様式古相から新相への過渡期に位置するとみられる。

土坑2（図14）

広口壺（14-1）は、頸部は直立するが、口縁部、体部への接続はスムースで、くびれは不明瞭である。内外面にハケを施す。畿内第V様式の新相に位置するとみられる。

溝1（図15）

溝1の出土土器は、弥生土器や庄内式土器、布留式土器など幅広くある。溝1の埋土は3層に分離でき、層位ごとに遺物を取り上げたが、各層による遺物の時期差はみられなかった。

器台（15-1）は体部と裾部がスムースに移行し、長頸壺（15-2）は体部と頸部はなだらかにつながる。両者は畿内第V様式でも新しい様相を呈する。

手焙形土器（15-5）は、体部口縁から蔽部はスムースに移行し、体部高は低いとみられ、庄内2式ないし3式に併行するとみられる。

甕（15-6）は体部に荒いハケを施す。口縁部がS字状に屈曲する。いわゆる東海系のS字状口縁甕で、色調が明黄白色を呈し、胎土もチャート細粒を多量に含むなど在地の土器とは異なる。

搬入土器としては、このほか、有段口縁甕（15-8）がある。口縁部はややひらき、その外面に擬凹線を施す。色調は乳白色を呈し、石英・チャート細粒を多量に含む。北陸系とみられる。

（15-10）は器台と思われる。特異な形状である。受け部は、上部が窪んだ円盤状を呈している。また、下方から8個の円孔が穿たれている。体部は筒状で、裾部は長胴形を呈する。

高杯（15-11）は大きな受部に外反する口縁を付加する。杯部内外面ともに縦方向のヘラミガキを施す。庄内0式に相当するとみられる。

小形丸底壺（15-12）は扁球形の体部に、器高の1/3程度の高さの口縁を具備する。口縁部径は体部径にちかい。布留3式の範疇でとらえていいだろう。甕（15-13）は長胴形気味の体部にやや内弯する口縁部を有する。布留1式に相当する。

住居1（図16～19）

出土土器のほとんどは、完形もしくは、完形に近い。完形でないものは、住居倒壊に伴い、破片が飛散したことによるとみられる。須恵器7点、土師器9点を図示した。

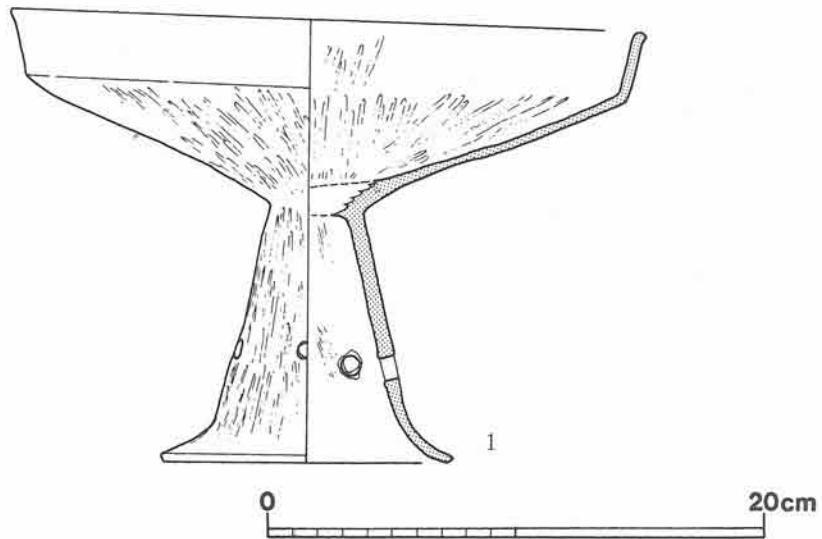


図 13 土坑 1 出土遺物(S. = 1/3)

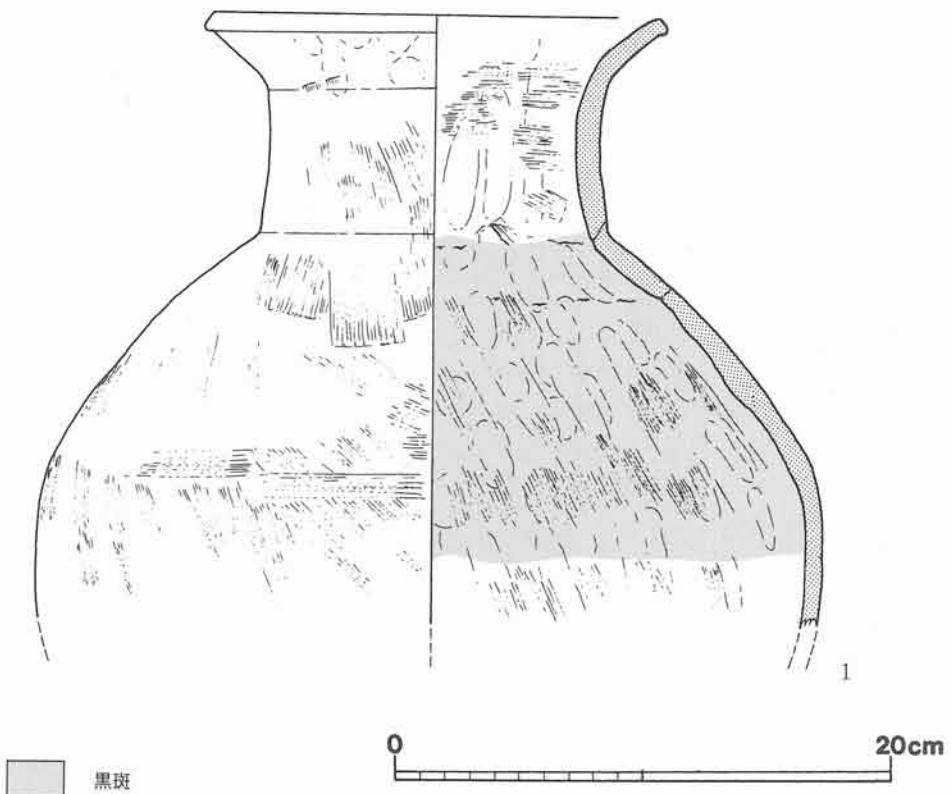


図 14 土坑 2 出土遺物(S. = 1/3)

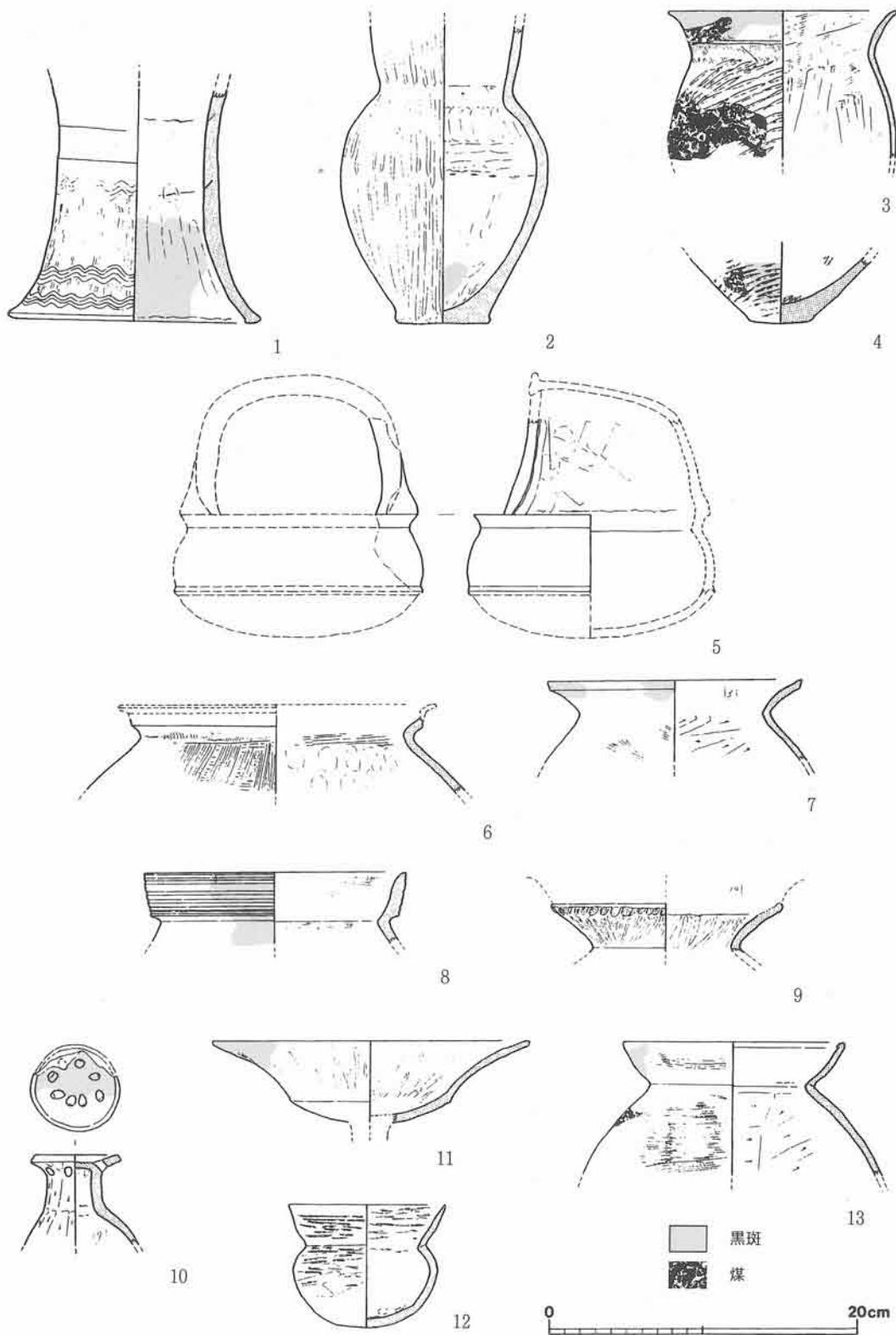


図15 溝1出土遺物(S. = 1/4)

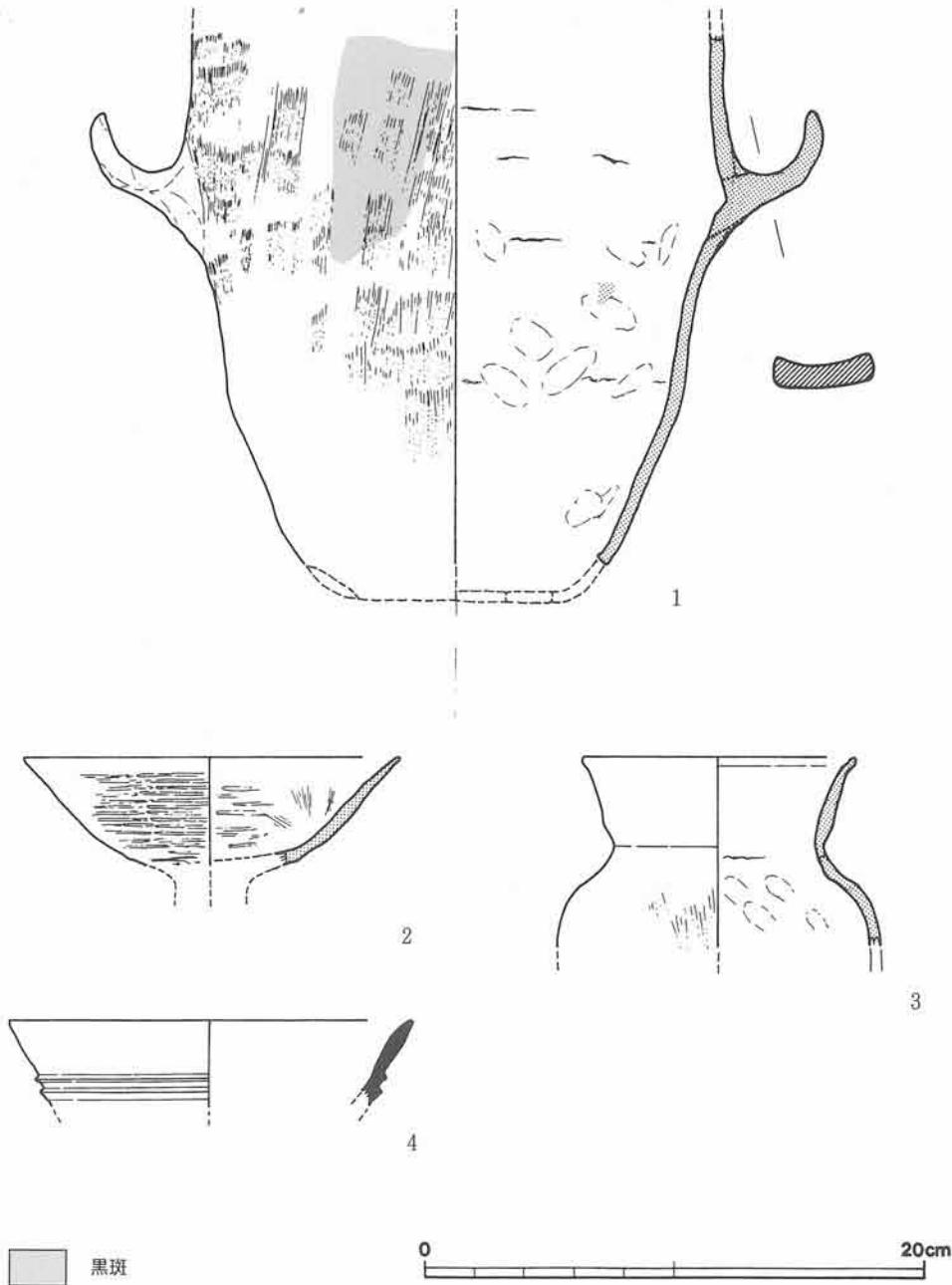
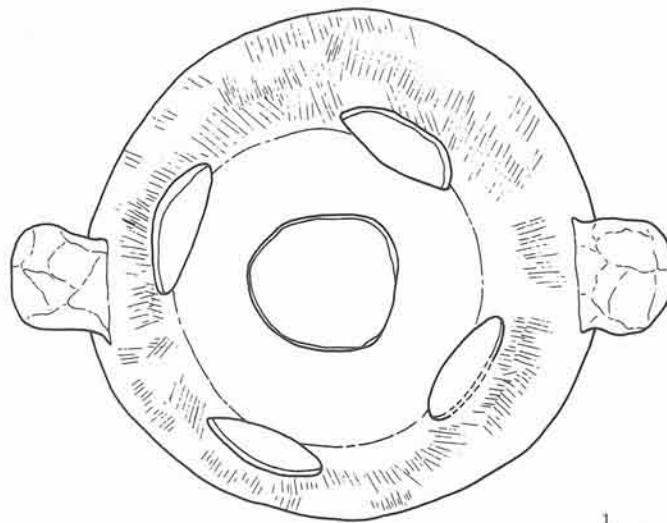
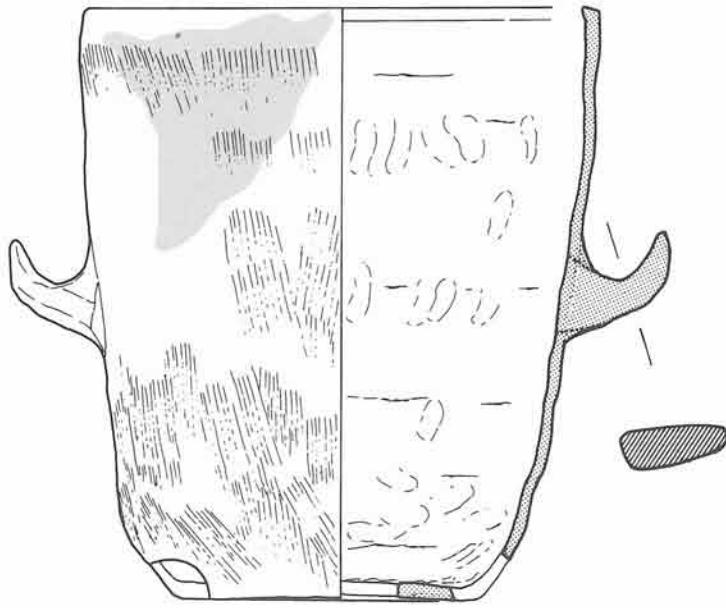


図 16 住居 1 窓出土遺物(S. = 1/3)



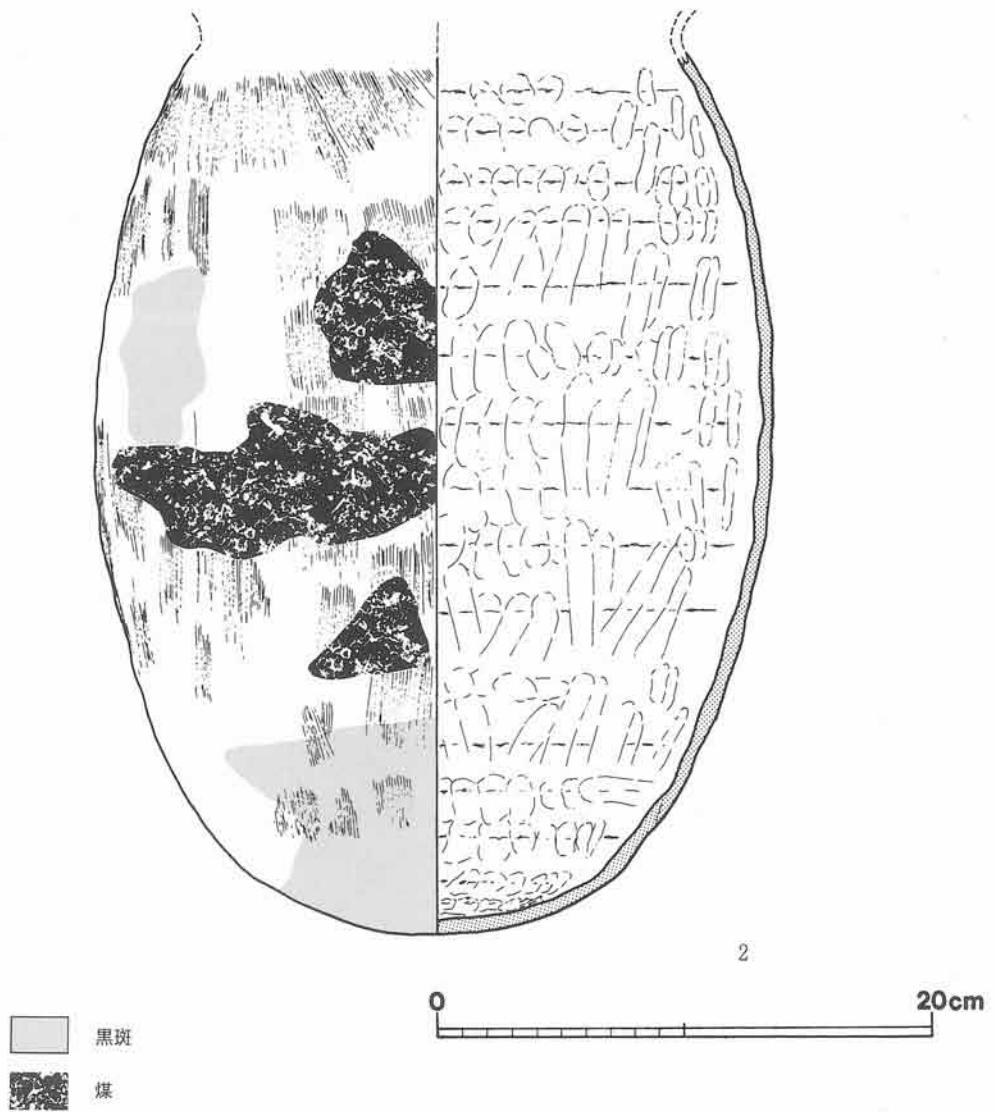
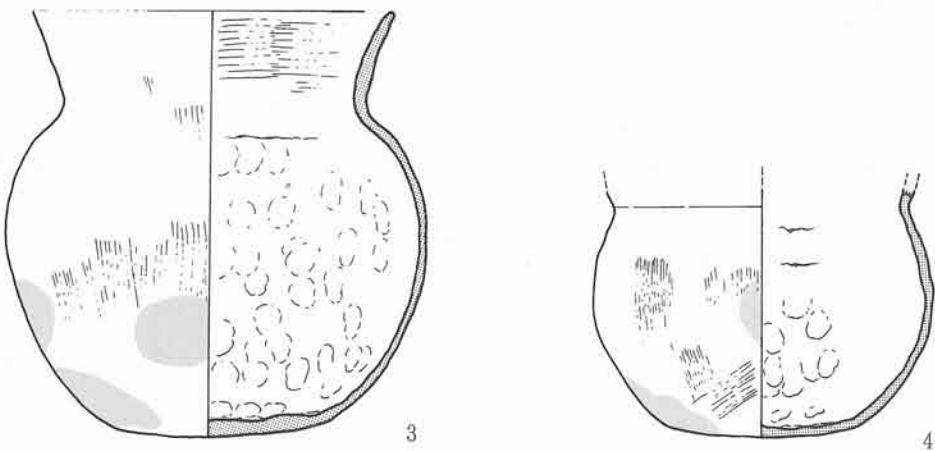
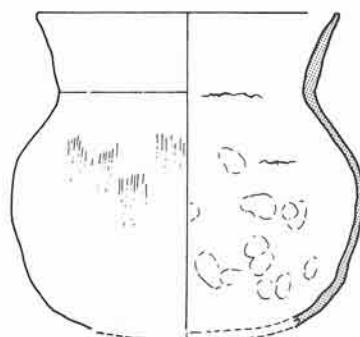


図18 住居1 A地点出土遺物(その2)(S. =1/3)

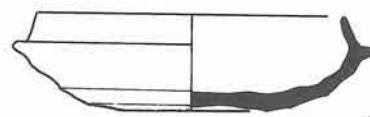


3

4

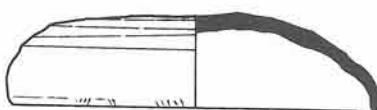


5



6

A地点



7



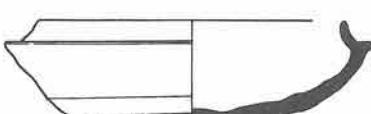
8



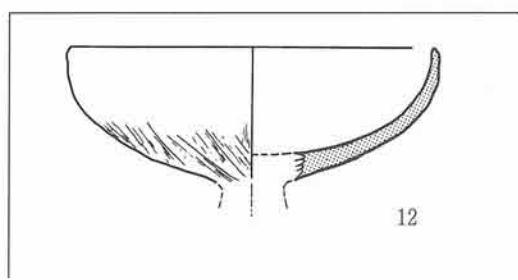
9



10



11

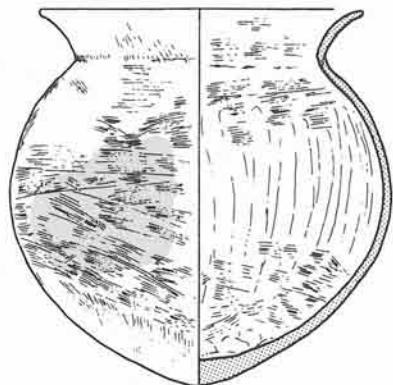


12

B地点



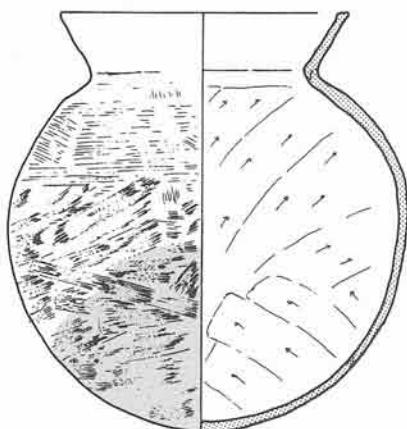
図19 住居1 A地点出土遺物(その3)・B地点・壁溝出土遺物(S. =1/3)



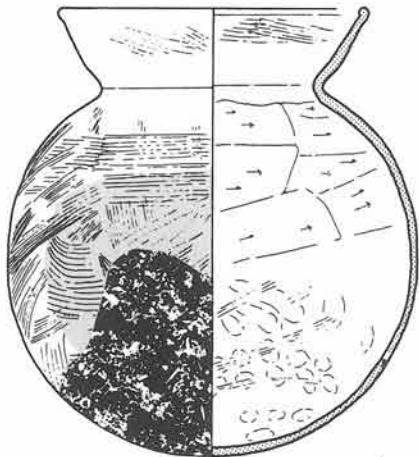
1



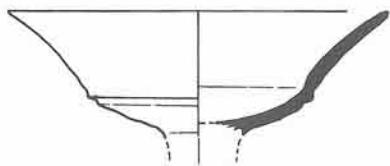
2



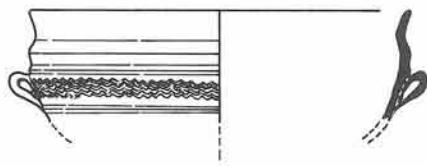
3



4



5



6

黒斑
 煤



図20 第2遺構面東地区出土遺物(S. =1/3)

(19-6~11) は須恵器杯身・杯蓋である。杯身は口径 12.0 ~ 12.2cm、器高 3.7 ~ 4.3cm、杯蓋は口径 14.1 ~ 14.5cm、器高 3.7 ~ 3.9cm であり、いずれもほぼ同じ法量である。

杯身は全体的に扁平であり、たちあがりは短く、内傾する。杯蓋は、天井部と口縁部の境界は不明瞭で、稜線はない。杯身、杯蓋ともに、ヘラ削りは粗雑で、範囲は 1/2 程度である。

これらの特徴から、いずれも TK 209 型式に相当する。

第2 遺構面東地区（図20）

「遺構」で記したように、第2 遺構面東地区からはコンテナ 2 箱分の遺物が出土した。そのうち 6 個体を図示したが、(20-1~4) は南東部で出土したもので、本来、検出できなかった溝 1 の東側部分の埋土中に含まれていた土器である可能性が高い。(20-5・6) は北半で出土したもので、溝 1 とは別の遺構が存在したと考えられる。

甕 (20-1) はやや尖り気味の丸底で、外反する口縁部をもつ。器形は庄内大和形甕を呈しているが、外面はヨコ方向のハケで仕上げ、内面はヨコ方向のハケ後、タテ方向のナデを施す。やや特異な甕であるので時期決定は困難であるが、多様性に富んだ庄内式甕がみられる布留 0 式前後に位置するとみられる。

甕 (20-2) は体部には荒いハケを施し、口縁部が短く、外方へ S 字状に屈曲するいわゆる東海系 S 字状口縁甕である。胎土は角閃石細粒を多量に含んでいる。布留 0 式ないし 1 式に併行するとみられる。

甕 (20-3・4) は、やや内彎する口縁部とほぼ球形の体部をもつ。両者は布留 2 式に相当しよう。

高杯 (20-5・6) は初期須恵器である。(20-5) は無蓋高杯である。口縁部が外反し、口縁部と底部の境界には段を有する。非常に丁寧なつくりである。全体の色調は淡赤紫色を呈する。(20-6) はやや丸みを帯びた体部に把手がつき、屈曲する口縁部を有する。

4. まとめにかえて

今次調査は 100m² に満たない調査であったが、いくつかの新知見を得ることができた。

住居 1 は焼失住居であったことから、古墳時代後期の住居址としては極めて稀なことに、非常に良好な状態で土器群を検出できた。このことは、住居内における使用目的別の土器構成や住居内の空間利用、居住人数などを知るにあたっての極めて貴重な資料になるであろう。

また、住居 1 を検出したことにより、古墳時代後期における居住域の広がりを知ることができた。今次調査地の西約 230m の第 7 次調査（豊岡 1989）地でも古墳時代後期の住居址が検出されている。

以上の通り、今次調査では、弥生時代以来の濃密な遺構・遺物と共に、主に、古墳時代の遺構について大きな成果があった。

引用・参考文献

- 佐原 真 1968 「畿内地方」『弥生式土器集成』本編 2
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群 I』(『平安学園高校考古学クラブ研究報告』第4号)
- 寺沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊)
- 豊岡卓之 1989 「御所市鴨都波遺跡第7次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1988年度』
- 藤田和尊 1994 『奈良県御所市 檜原遺跡 I』(『御所市文化財調査報告書』第17集)
- 1992 『奈良県御所市鴨都波12次概報』(『御所市文化財調査報告書』第12集)
- 藤田和尊・木許守 2001 『鴨都波1号墳 調査概報』 学生社

表2 鴨都波遺跡 第16次調査 出土土器観察表

図-遺物番号 器種 出土場所	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
13-1 弥生土器 高杯 土坑1	口径 24.7cm (残存1/8からの回転復元) 裾部径 11.4cm 器高 16.9cm 杯部は大きく広がる皿形を呈し、直立に近い口縁部がつく。脚部は緩やかに広がって裾部で急に短く開く。径8mmの透孔が、外面から5方向に穿たれている。 ・外面 ヨコ方向のナデ。 ・内面 ヨコ方向のナデ。 ・外面 タテ方向のヘラミガキ (5条/cm)。 ・内面 タテ方向のヘラミガキ (5条/cm)。 ・外面 タテ方向のヘラミガキ (5条/cm)。 ・内面 タテ方向のハケ後、ヨコ方向のナデ。	良好	・明赤褐色 ・明灰褐色 ・淡赤褐色	
14-1 弥生土器 広口壺 土坑2	口径 15.2cm (残存1/2からの回転復元) 頸部は直立し、口縁部は外上方に開く。口縁端部は外傾し、その下端は強いヨコナデにより、わずかに突出する。肩部はあまり張らず、体部最大径は体部高のはば中位にあると思われる。頸部と体部の境界は明瞭に屈曲している。 ・外面 タテ方向のハケ (10条/cm)。 ・内面 ヨコ方向のハケ (10条/cm)。 ・外面 タテ方向のハケ (10条/cm)。 ・内面 タテ方向のハケ (10条/cm)。 - - -	良好	・淡赤褐色 ・淡赤灰褐色 ・灰褐色	
15-1 弥生土器 器台 溝1 2層	裾部径 14.6cm (残存1/2からの回転復元) 直立ぎみの体部から、裾部へとスムーズに移行する。体部と脚部裾には櫛描波状文を施す。 ・外面 欠損 ・外面 タテ方向のヘラミガキ (4条/cm) 後ナデ。1単位4条の波状文を1帯施す。 ・内面 タテ方向のナデ。 ・外面 ヨコナデ。1単位4条の波波文を2帯施す。 ・内面 ヨコナデ。	良好	・淡赤橙色 ・暗赤灰色 ・暗赤紫色	体部上半は 摩滅のため、 調整等は確認 しがたい。 内面に黒斑。
15-2 弥生土器 長頸壺 溝1 2層	体部径 13.0cm 長胴形の体部に、やや外上方に開く直線的な口頸部を有する。体部と頸部の境界はゆるやかに屈曲する。底部はやや突出する。 ・外面 タテ方向のヘラミガキ (2条/cm) 後ナデ。 ・内面 ナデ。 ・外面 タテ方向のヘラミガキ (2条/cm) 後ナデ。 ・内面 板ナデ。 ・外面 ナデ。 ・内面 板ナデ。	ややあまい	・黄灰褐色 ・黄灰褐色 ・暗黄灰褐色	
15-3 弥生土器 瓢 溝1 2層	口径 14.2cm (残存1/3からの回転復元) 長胴形の体部に、外反した口縁部を有する。口縁部と体部の境界は緩やかに屈曲する。 ・外面 ナナメ方向のハケ (10条/cm)。 ・内面 ナナメ方向のハケ (8条/cm)。 ・外面 右上がりのタタキ (2条/cm) を下から上へ左廻りに行う。 ・内面 ナナメ方向のハケ (7条/cm) 後、タテ方向の板ナデを左廻りに行う。 ・欠損	良好	・淡黄褐色 ・明黄褐色 ・淡黄褐色	口縁部と体 部の外面に煤 付着。 口縁部に黒 斑。

図一 遺物番号 器種 出土場所	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部（脚台部）	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備 考
15-4 弥生土器 甕または壺底部 溝1 3層	底部径 4.0cm (残存5/6程度) 底部の突出はほとんどない。 ・欠損 ・外面 右上がりのタタキ (3条/cm) を下から上へ左廻りに行う。 内面 ナデ。 ・外面 ナデ。 内面 クモの巣状ハケ (10条/cm)。	良好	・暗灰褐色 ・明黄白色 ・淡黄白色	体部外面の一部に黒斑。
15-5 弥生土器 手焙形土器 溝1 2層	体部径 15.7cm (残存1/4からの回転復元) 体部はやや扁平であり、蔽部は体部口縁からスムースに移行する。蔽部の端部には面をなす。 ・欠損 ・外面 ヨコナデ。 内面 板ナデ。 ・欠損	良好	・淡黄褐色 ・灰褐色 ・淡灰色	
15-6 弥生土器 甕 溝1 2層	口径 18.6cm 口縁部は外上方に伸び、S字状に屈曲する。口縁端部の形状は欠損のため不明。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコ方向のハケ (5条/cm) 後、ナナメ方向のハケ (6条/cm) を施す。 内面 ナデ。 ・欠損	良好	・淡黄白色 ・明黄白色 ・淡灰色	搬入土器
15-7 弥生土器 甕 溝1 2層	口径 16.0cm (残存1/4からの回転復元) 口縁部はやや外反し、端部はわずかにつまみあげている。口縁部と体部の境界は内外面ともに明瞭である。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 左ナナメ方向のハケ (7条/cm)。 内面 左廻りのヘラケズリ。 ・欠損	ややあまい	・明黄褐色 ・灰黄褐色 ・暗黒灰色	
15-8 弥生土器 甕 溝1 2層	口径 15.3cm (残存1/12からの回転復元) 体部と口縁部の境界は明瞭にくびれ、口縁部はややひらく。口縁端部は丸く収める。 ・外面 ヨコナデおよび擬凹線 (6条)。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコ方向のケズリ。 ・欠損	良好	・明黄白色 ・乳白色 ・淡灰白色	外面に黒斑。 搬入土器
15-9 弥生土器 壺 溝1 2層	口径 14.6cm (残存1/6からの回転復元) 二重口縁壺であるが、口縁部は欠損している。頸部はやや外反しながらひらき、端部外面には外傾する面を有し、刻目を施している。 ・外面 タテ方向のヘラミガキ (5条/cm)。 内面 タテ方向のヘラミガキ (4条/cm)。 ・欠損 ・欠損	良好	・明黄白色 ・淡赤褐色 ・淡灰褐色	精良な胎土
15-10 弥生土器か? 器台か? 溝1 2層	口径 5.3cm (残存3/5程度) 頸部径 3.4cm ほぼ直立した体部に、上部がやや窪んだ円盤状の受部がつく。上面には、径4~6mmの円孔が8個穿たれている。 ・外面 ナデ。 内面 ナデ。 ・外面 タテ方向のヘラケズリ。 内面 ヨコナデ。 ・欠損	良好	・淡黄灰褐色 ・淡黄褐色 ・暗灰色	器種不明。 類例が乏しい。

図一遺物番号 器種 出土場所	法量と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部（脚台部）	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備 考
15-11 土師器 高杯 溝1 3層	口径 20.0cm (残存1/4からの回転復元) 杯部の口縁部高は体部高を凌駕し、口縁部は大きく外反して開く。口縁部と体部の境界は明瞭である。 ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 タテ方向のヘラミガキ (3条/cm) 後ヨコナデ。 ・内面 タテ方向のヘラミガキ (3条/cm) ・欠損	あまい	・明黄褐色 ・淡赤褐色 ・明黄褐色	口縁部外面に黒斑。
15-12 土師器 小形丸底壺 溝1 2層	口径 10.8cm (残存7/8) 扁球形の体部に直線的にのびる口縁部がつく。口縁部径は体部径をわずかに超える。 ・外面 ヨコ方向のヘラミガキ (8条/cm)。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコ方向のヘラケズリ。 ・内面 ・――	ややあまい	・淡橙色 ・淡橙色 ・灰褐色	精良な胎土
15-13 土師器 瓢 溝1 2層	口径 14.0cm (残存1/4からの回転復元) 口縁部はわずかに内巻しつつ外上方にひらく。口縁端部は内面にやや肥厚させ、外面を丸くおさめる。 ・外面 ヨコナデ。黒斑。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコ方向のハケ (8条/cm)。黒斑。 ・内面 左廻りのケズリ。 ・欠損	ややあまい	・明黄褐色 ・淡灰褐色 ・明黄灰褐色	口縁部外面に黒斑。 体部外面に煤。
16-1 土師器 甌 住居1 床面	体部径 21.6cm (残存1/2からの回転復元) 体部の下半はやや外上方に広がり、上半は直立する。把手は、断面が扁平な長方形で、先端は上方に屈曲している。また、体部に挿入して接合している。 ・欠損 ・外面 タテ方向のハケ (9条/cm)。 ・内面 タテ方向のナデ。 ・欠損	ややあまい	・明灰黄褐色 ・灰黄褐色 ・明灰黄褐色	体部に黒斑。
16-2 土師器 高杯 住居1 床面	口径 12.2cm (残存1/8からの回転復元) 口縁部は直線的に外上方に広がり、端部はごくわずかに外反して開き、先端部は丸く収めている。体部と口縁部はスムースに移行する。 ・外面 ヨコ方向のナデ。 ・内面 ヨコ方向のナデ。 ・外面 ヨコ方向のヘラミガキ (6条/cm)。 ・内面 ヨコ方向のヘラミガキ (3条/cm)。 ・欠損	ややあまい	・灰黄褐色 ・明黄褐色 ・灰褐色	
16-3 土師器 壺 住居1 床面	口径 10.3cm (残存1/3からの回転復元) 口縁部は外上方に広がり、端部はわずかに外反して開く。口縁端部先端は丸く収めるが、この時のヨコナデによりわずかに窪む。 ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 タテ方向のハケ (6条/cm)。 ・内面 ヨコ方向のヘラケズリ。 ・欠損	良好	・明赤褐色 ・明黄褐色 ・明黄褐色	
16-4 須恵器 高杯 住居1 床面	口径 16.0cm (残存1/10からの回転復元) 口縁部は直線的に外上方に広がり、外面には2条の突帯を施している。 ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・欠損 ・欠損	良好	・暗灰色 ・暗灰色 ・暗灰赤色	暗黒緑色の自然釉。

図-遺物番号 器種 出土場所	法量と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部(脚台部)	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
17-1 土師器 甌 住居1 床面	口径 20.5cm 器高 23.1cm <p>底部は平底で、体部はやや外方に直立する。口縁部は直立し、上端部に外傾する面をつくり、内面は浅く窪む。把手の先端は上方に屈曲している。断面は歪な長方形である。また、体部に挿入して接合している。底部中央に、1個の円孔、外周斜面に4個の橢円形孔の蒸気孔を配する。</p> <ul style="list-style-type: none">・外面 ヨコ方向のナデ。・内面 ヨコ方向のナデ。・外面 タテ方向のハケ (6条/cm)。・内面 ヨコ方向のナデ。・外面 板ナデ。・内面 指頭による押圧。	良好	・明黄橙色 ・明黄褐色 ・明灰褐色	
18-2 土師器 長胴甌 住居1 床面	体部径 26.6cm 丸底で、体部は長胴形をなす。 <ul style="list-style-type: none">・欠損・外面 タテ方向のハケ (10条/cm)。・内面 タテ方向のナデ。・外面 ナデ。・内面 指頭による押圧。	良好	・明灰褐色 ・明褐色 ・灰褐色	体部と底部に黒斑。 体部に煤が付着している。
19-3 土師器 壺 住居1 床面	口径 14.0cm (残存7/8) 器高 16.5cm <p>球形に近い体部であるが、底部は平底である。口縁部は直線的に外上方に開き、端部は丸く収めている。体部と底部との境界は不明瞭である。</p> <ul style="list-style-type: none">・外面 ヨコ方向のナデ。・内面 ヨコ方向のハケ (4条/cm)。・外面 タテ方向のハケ (6条/cm)後ナデ。・内面 タテ方向のナデ。・外面 ナデ。・内面 指頭による押圧。	あまい	・明黄褐色 ・明黄褐色 ・明黄褐色	体部に黒斑。
19-4 土師器 壺 住居1 床面	体部径 13.6cm (残存1/6からの回転復元) 底部径 6.8cm <p>体部最大径の割に体部高が低く、やや扁平な感を受ける。底部は平底である。口縁部は、欠損するが、外上方に伸びるとみられる。口縁部と体部の境界は緩やかに屈曲する。</p> <ul style="list-style-type: none">・欠損・外面 タテ方向のハケ (6条/cm) 後一部ナメ方向のハケ。・内面 指頭による押圧。ヨコナデ。・外面 ナデ。・内面 指頭による押圧。	良	・暗灰褐色 ・暗灰褐色 ・灰黃褐色	体部に黒斑。
19-5 土師器 壺 住居1 床面	口径 11.8cm (残存1/6からの回転復元) <p>体部最大径は体部中位よりやや上部にあり、肩がやや張る。口縁部と体部の境界は緩やかには屈曲する。口縁部は外上方に開き、その端部はわずかに外反している。</p> <ul style="list-style-type: none">・外面 ヨコナデ。・内面 ヨコナデ。・外面 タテ方向のハケ (10条/cm)。・内面 指頭による押圧。・外面 ヨコナデ。・内面 指頭による押圧。	良	・暗褐色 ・暗灰褐色 ・灰褐色	

図-遺物番号 器種 出土場所	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
19-6 須恵器 杯身 住居1 床面	口径 12.2cm 器高 3.7cm <p>受部はほぼ水平にのび、立ち上がりは、内傾する。受部と立ち上がりの端部は丸く収めている。器高は低く、扁平であり、底部は平坦である。</p> <p>・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデおよび天井部1/2はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 ・内面 ヨコナデ。 ・――</p>	良好	・暗灰色 ・暗灰色 ・暗灰色	底部内面中央に同心円状のあて具らしき痕跡が残る。外面の約1/2に灰白色の自然釉がかかっている。
19-7 須恵器 杯蓋 住居1 床面	口径 14.3cm 器高 3.8cm <p>全体的に丸みを帯びており、天井部と口縁部の境界は明瞭ではない。口縁部は内彎し、その端部は丸く収めている。</p> <p>・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデおよび天井部1/2はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 ・――</p>	良好	・灰色 ・灰色 ・――	口縁部に焼成前の歪みが生じている。 全体に形は歪である。
19-8 須恵器 杯蓋 住居1 床面	口径 14.5cm 器高 3.7cm <p>全体的に丸みを帯びており、天井部と口縁部の境界は明瞭ではない。口縁端部はやや内彎し、その端部は丸く収めている。</p> <p>・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデおよび天井部1/2はヘラケズリ(ロクロ回転方向は右廻り)。 ・内面 ヨコナデ。 ・――</p>	良好	・明青灰色 ・灰白色 ・――	
19-9 須恵器 杯蓋 住居1 床面	口径 14.1cm 器高 3.9cm <p>天井部と口縁部との境界は不明瞭である。天井部は平坦となる。口縁部はやや外方へひらく。口縁端部はわずかに外反し、先端は丸く収めている。</p> <p>・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデおよび天井部1/2はヘラケズリ(ロクロ回転方向は左廻り)。 ・内面 ヨコナデ。 ・――</p>	良好	・明灰白色 ・灰白色 ・灰色	
19-10 須恵器 杯身 住居1 床面	口径 12.0cm 器高 4.3cm <p>受部はやや斜め上方に向く。立ち上がりは低く、内傾する。底部はわずかに平坦になっているが、全体的には丸みをもつている。</p> <p>・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデおよびヘラケズリ(ロクロ回転方向は右廻り)。 ・内面 ヨコナデ。 ・――</p>	良好	・明青灰白色 ・明青灰色 ・暗黒灰色	蓋を被せた状態で焼成された痕跡が残っている。
19-11 須恵器 杯身 住居1 床面	口径 12.0cm 器高 4.3cm <p>受部はほぼ水平である。立ち上がりは低く、内傾するが、端部は直立する。底部はゆるやかな曲線を描く。</p> <p>・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデおよびヘラケズリ(ロクロ回転方向は右廻り)。 ・――</p>	良好	・暗灰色 ・明青白色 ・灰色	

図-遺物番号 器種 出土場所	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
19-12 土師器 高杯 住居1 壁溝	口径 14.4cm (残存1/2からの回転復元) 杯部は楕形を呈し、口縁部は内彎ぎみに立上がり、端部は丸く収めている。 ・外面 ヨコ方向のナデ。 ・内面 ヨコ方向のナデ。 ・外面 タテ方向のケズリ。 ・内面 ナデ。 ・――	良好	・淡灰褐色 ・明赤褐色 ・淡灰褐色	
20-1 土師器 瓢 第2遺構面東地区	口径 12.6cm 器高 14.8cm 体部はほぼ球形に近いが、尖り気味の丸底である。口縁部は外反し、端部を丸く収めている。 ・外面 ナナメ方向のハケ (10条/cm) 後、ヨコナデ。 ・内面 ヨコ方向のハケ (8条/cm) 後、ヨコナデ。 ・外面 タテ方向後、ヨコ方向のハケ (10条/cm)。頸部付近はヨコナデを施す。 ・内面 ヨコ方向のハケ (10条/cm) 後、タテ方向のナデ。 ・外面 ナデ。 ・内面 指頭による押圧後、ヨコナデ。	ややあまい	・淡黄白色 ・淡黄褐色 ・淡黄褐色	体部外面に黒斑。
20-2 土師器 瓢 第2遺構面東地区	口径 19.0cm (残存1/12) からの回転復元 口縁部は外上方に大きく開いた後、S字状に屈曲する。口縁端部は丸く収めている。 ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコ方向のハケ (6条/cm)。 ・外面 ナナメ方向のハケ (8条/cm)。 ・内面 ヨコナデ。 ・欠損	ややあまい	・明黄白色 ・明黄白色 ・淡灰色	搬入土器
20-3 土師器 瓢 第2遺構面東地区	口径 11.2cm 器高 16.5cm 体部は球形を呈し、口縁部はほぼ直線的に外上方に開いている。口縁端部は内外にごく僅かに肥厚し、わずかに内傾する面をなす。 ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコ方向のハケ (6条/cm) 後、体部下半にはナナメ方向のハケ (14条/cm)。 ・内面 左廻りのヘラケズリ。 ・外面 ヨコ方向のハケ (14条/cm)。 ・内面 指頭による押圧後、ヘラケズリ。	良	・淡黄褐色 ・淡灰褐色 ・淡黒色	体部と底部に黒斑。
20-4 土師器 瓢 第2遺構面東地区	口径 11.8cm (残存1/2からの回転復元) 器高 17.6cm 体部はほぼ球形を呈している。口縁部はほぼ直線的に外上方に開いている。口縁端部は内面に肥厚し、外面端部を丸く収める。 ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 肩部にヨコ方向のハケ (5条/cm) 後、不定方向のハケ。 ・内面 上半に左廻りのヨコ方向のケズリ。下半にはヨコ方向のハケ (7条/cm) 後、指頭による押圧。 ・外面 タテ方向のハケ (7条/cm)。 ・内面 指頭による押圧。	良好	・淡橙褐色 ・灰黃褐色 ・灰褐色	体部に黒斑。 体部と底部に煤付着。

図-遺物番号 器種 出土場所	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部（脚台部）	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
20-5 須恵器 無蓋高杯 第2遺構面東地区	口径 15.0cm (残存4/5程度) 口縁部は外反しながら広がり、端部は丸く収めている。 口縁部と体部との境界には凹線が巡る。 ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデおよび底部にはヘラケズリ (ロクロ回転方向は右廻り)。 ・欠損	良好	・暗赤紫色 ・淡赤紫色 ・赤茶色	
20-6 須恵器 無蓋高杯 第2遺構面東地区	口径 15.0cm (残存1/4からの回転復元) 口縁部は、外反して開き、端部は丸く収めている。体部は丸みを帯び、外面には稜で区分した文様帶があり、1単位7条の櫛描波状文が巡る。文様帶には断面長方形のつまみがつく。 ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・欠損	良好	・青灰色 ・暗青灰色 ・淡赤紫色	内面全面と 外面の一部、 つまみ上部に 灰白色の自然 釉。

附. 平成12・13年度 個人住宅建築に伴う市内遺跡発掘調査

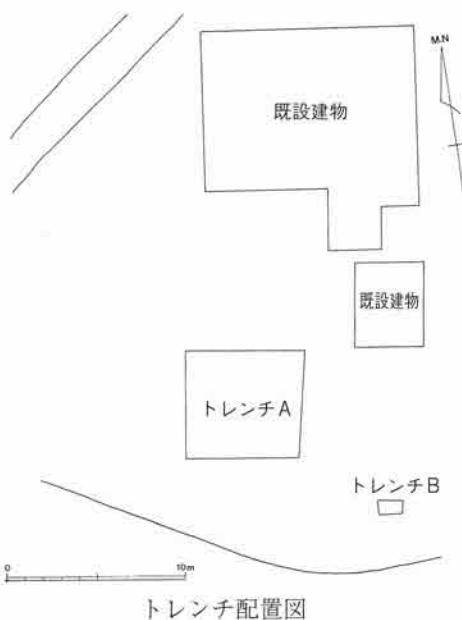
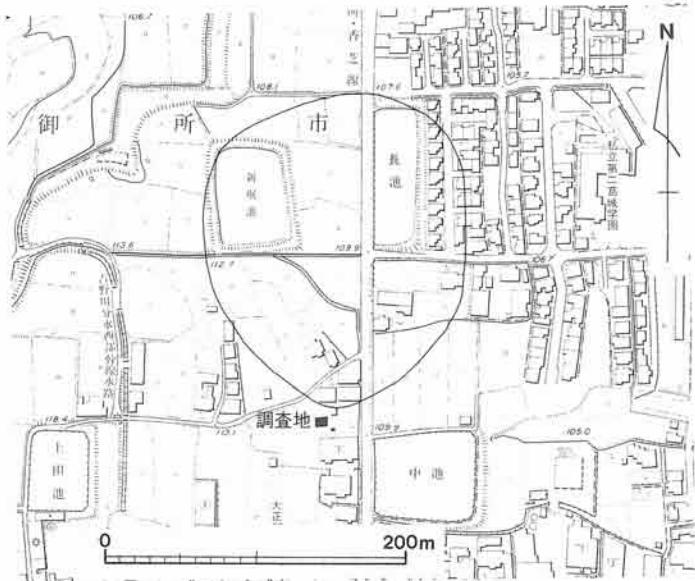
櫛羅遺跡第1次発掘調査

1. 調査の契機と経過

平成13年11月5日、御所市大字櫛羅126-5について、個人住宅を建築するとの目的で、文化財保護法57条の2に基づいて発掘届が提出された。当該地は櫛羅遺跡（『奈良県遺跡地図』第3分冊「16-B-427」）に隣接しており、事前に発掘調査が必要と判断されることから、当委員会はこれを奈良県教育委員会文化財保存課に進達した。対して、同課から当該地の取り扱いに関する通知があったので、これを受けて「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出了。

調査は平成13年1月15日から実施し1月22日に終了した。実働日数は5日間であった。

調査地は、工事の計画に合わせ、建物部分に長さ6.7m、幅6mのトレンチを設定した。また浄化槽部分には、長さ1.4m、幅0.8mのトレンチを設定し、ともに現状の地表面から約2mの深さまで掘削した。トレンチの名称は、建物部分をトレンチA、浄化槽部分をトレンチBと呼んだ。

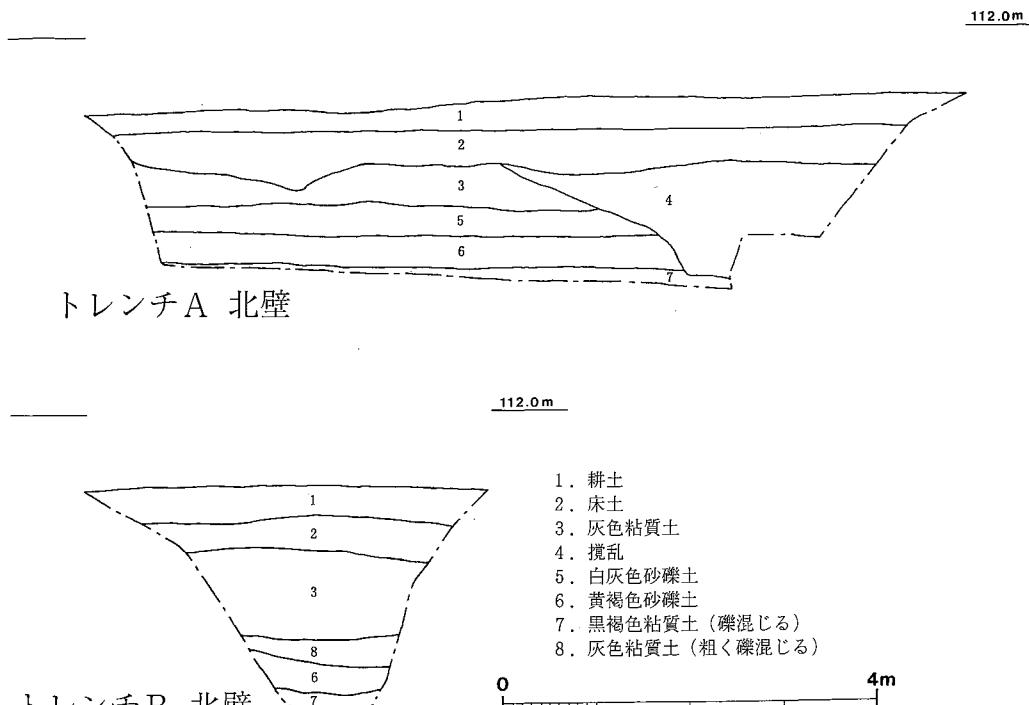


2. 調査結果

トレンチAに見られた土層の堆積は、地表から60cmが現耕作土（第1層）、耕作床土（第2層）であり、その下層に灰色粘質土（層厚40cm、第3層）、白灰色砂礫土（層厚30cm、第5層）、黄褐色砂礫土（層厚30cm、第6層）、黒褐色粘質土（層厚20cm、第7層）があった。各層とも西から東へ若干傾斜している状況が看取された。遺物は、第2層からサヌカイト剝片（図版11）、第3層から時期不詳の青磁細片および若干の土師器細片が出土した。しかしながら、第3層から掘り込まれた攪乱坑が北東隅と南東隅の2箇所にあるものの、遺構については、まったく認められなかつた。

浄化槽部分であるトレンチBの層位もトレンチAと基本的に同様であり、やはり遺構・遺物が存在する徵候はなかった。

以上のように今回の調査では、遺構は検出されなかつた。遺物は若干量が出土したが、遺跡の範囲はより北部に存在すると判断された。



トレンチ土層断面図 (S. = 1/80)

森脇遺跡 発掘調査

平成13年10月に、御所市森脇365番地について、農家住宅建築を目的とした発掘届(57-2)が提出された。

当該地は、森脇遺跡(16-B-180)の一角に相当している。当市教育委員会は、この届出書を、工事によって影響が及ぶ範囲である、建物基礎工事部分および浄化槽部分の事前の発掘調査が必要との意見書を附して、奈良県教育委員会に進達した。その後、「埋蔵文化財発掘調査の通知について」(58-2)を提出した。

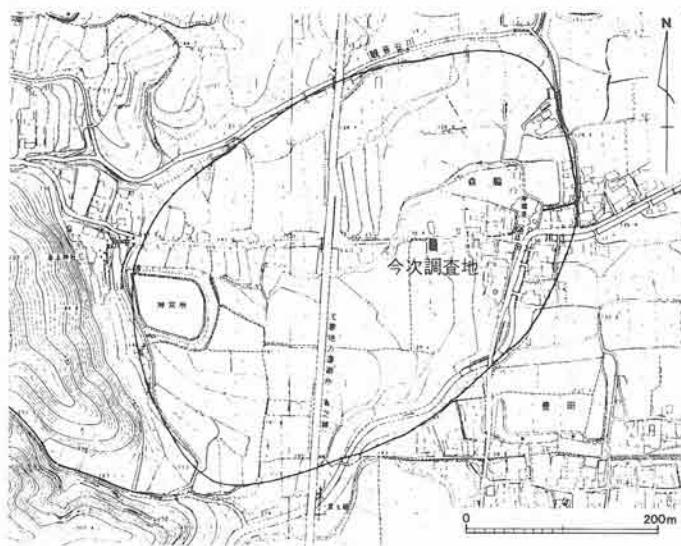
また、工事目的が住宅建築であり工事が急がれる事情もあり、できるだけ工事日程に支障がないように発掘調査が実施されるべきであると判断されたので、現地調査は、平成13年11月13日に着手した。

工事による新築建物基礎部分の掘削は、現状の地表面に厚さ20~30cmの盛土の後、深さ50cm程度が行なわれるのみである。したがって、まず現状の地表から20cmの深さでトレンチ掘削を行い、遺構・遺物の存否確認に努めた。その結果、建物部分の全体が、この深さまでであれば、旧耕作土および近代の盛り土に収まることがわかった(第1トレンチ)。この旧耕作土から、6世紀代とみられる須恵器甕破片1点が出土した。

そこで、下層の状態を把握する目的も併せ、浄化槽設置部分にやや深いトレンチを設定した(第2トレンチ)。第2トレンチでは、現地表から、25cmの厚みで旧耕作土および近代の盛り土があり、約50cmの黄褐色粗砂層を挟んで地山に至っていた。地山は、花崗岩のバイラン土で、拳大から20cm大の花崗岩礫を多く含んでいた。この間、ここにも、遺構・遺物が存在する兆候は見られなかった。

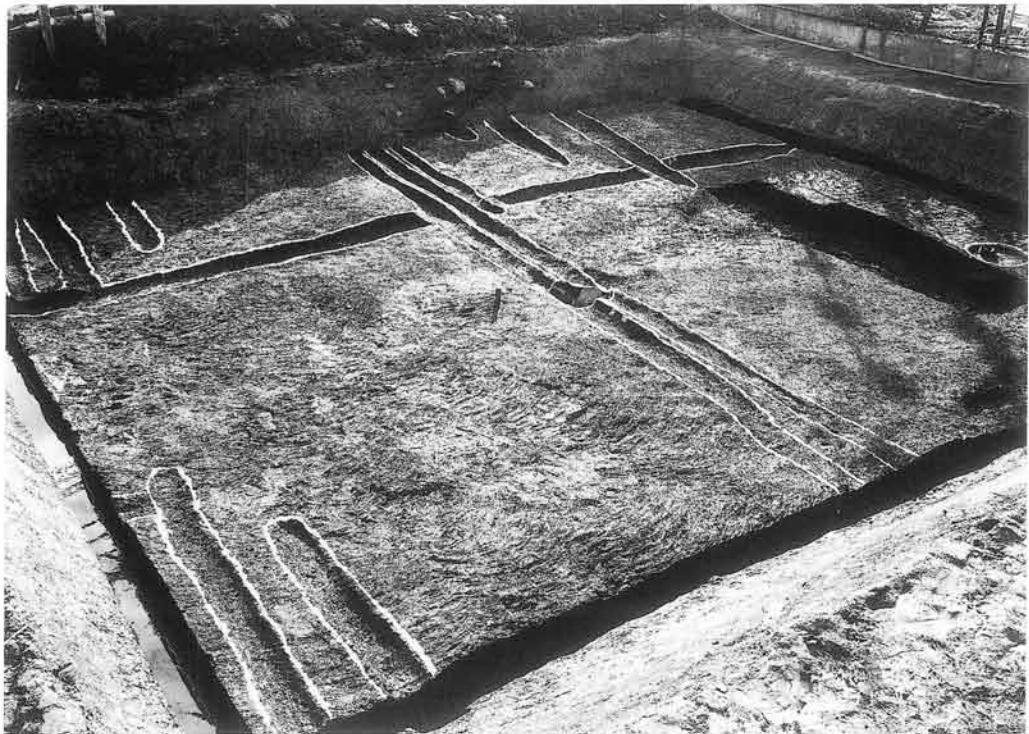
森脇遺跡は、葛城山東麓に所在する遺跡で、西から東に傾斜する緩斜面地に立地している。今回の調査地は、遺跡の東半部の、標高がより低い位置に当っている。調査面積が限られているために詳細は定かではないが、調査地の地山の状況から、ここに遺構などが存在しないとすれば、地表面近くに見られる遺物は、より高所からの流れ堆積によるものであろうか。

以上の知見から、今回工事については、埋蔵文化財に関しては、支障ないものと判断される。



森脇遺跡と調査地位置

図 版



鴨都波16次 第1遺構面全景(北から)



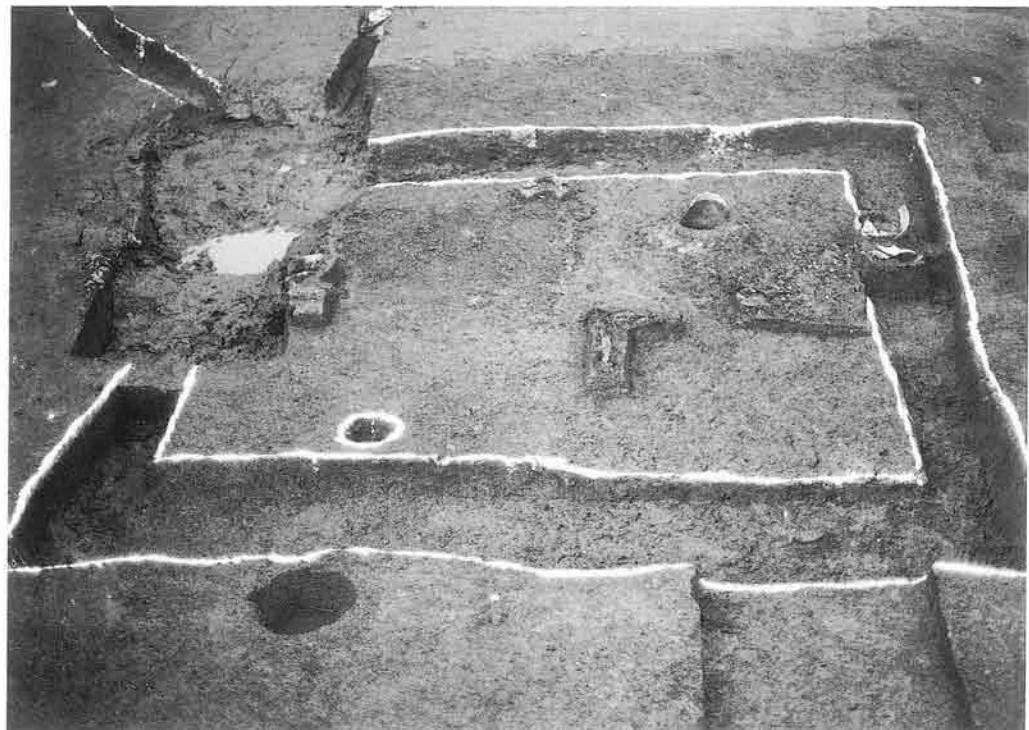
鴨都波16次 第2遺構面全景(北から)



鴨都波16次 土坑1 遺物出土狀況



鴨都波16次 土坑2 遺物出土狀況



鴨都波16次 住居1 検出状況



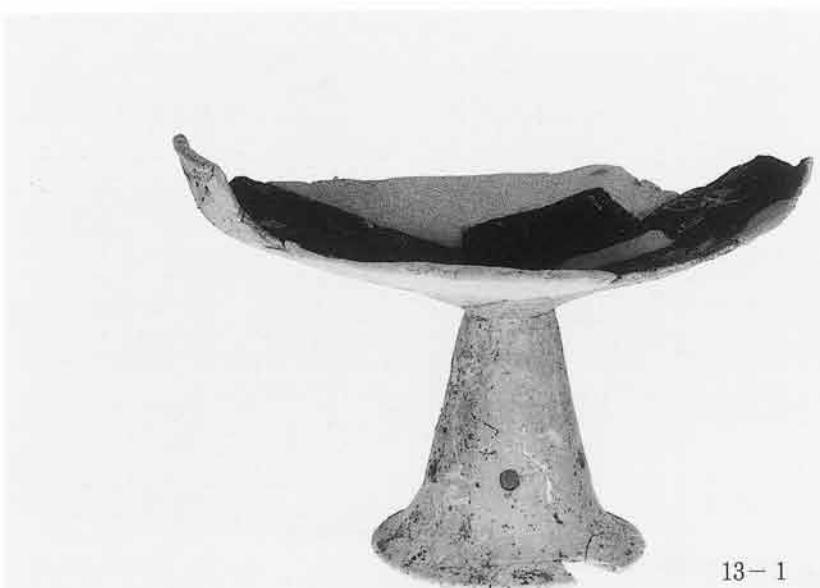
鴨都波16次 住居1 A地点 遺物出土状況



鴨都波16次 住居1 B地点 遺物出土状況



鴨都波16次 溝1 検出状況



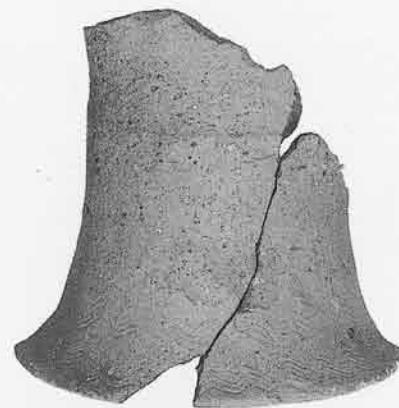
13-1

鴨都波16次 土坑1出土遺物(S. 1/3)



14-1

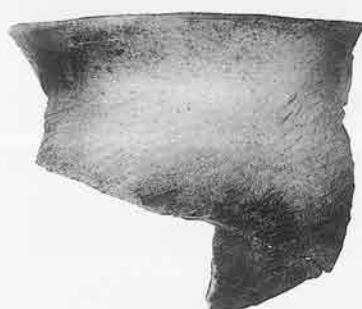
鴨都波16次 土坑2出土遺物(S. 1/3)



15-1



15-2



15-3



15-4



15-5



15-6



15-7



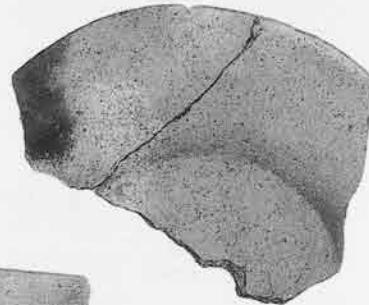
15-8



15-9



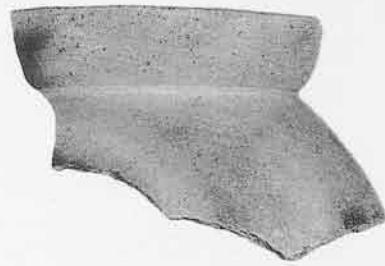
15-10



15-11



15-12



15-13



17-1



16-1

鴨都波16次 住居1出土遺物(その1)(S. 1/3)

図

版

8



18-2



16-3

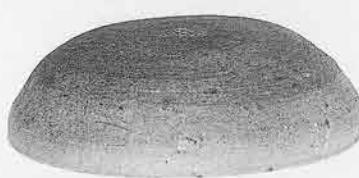


16-2

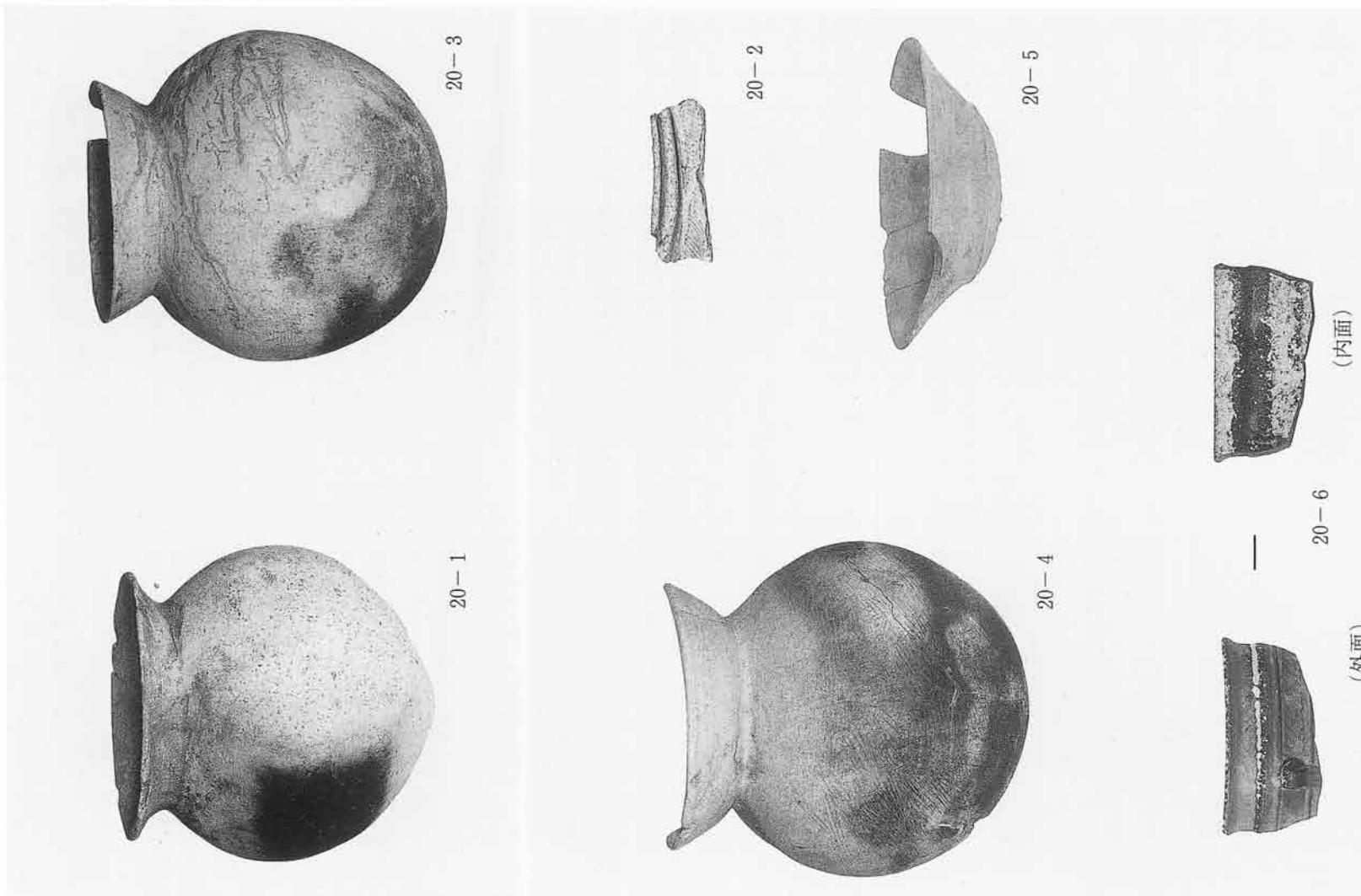


16-4

鴨都波16次 住居1出土遺物(その2)(S.≈1/3)



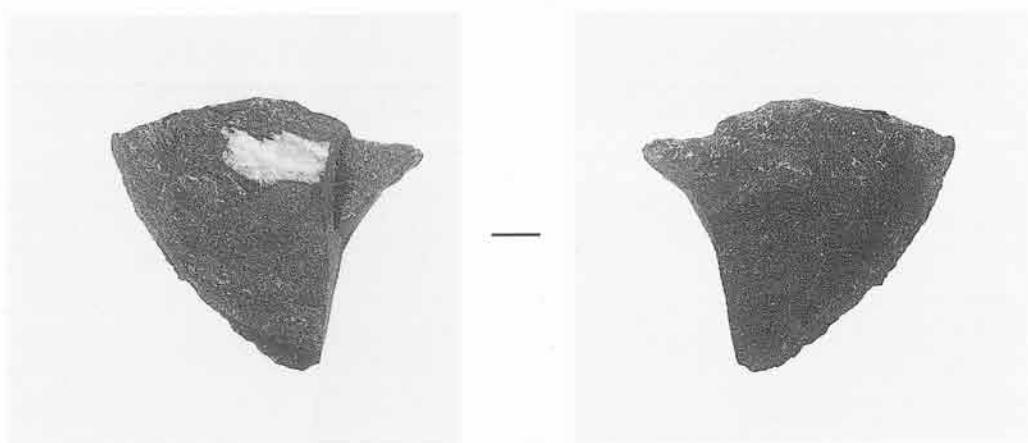
鴨都波16次 住居1出土遺物(その3)(S. 1/3)



鴨都波16次 第2遺構面東地区出土遺物(S. 1/3)



櫛羅遺跡 調査地全景（南から）



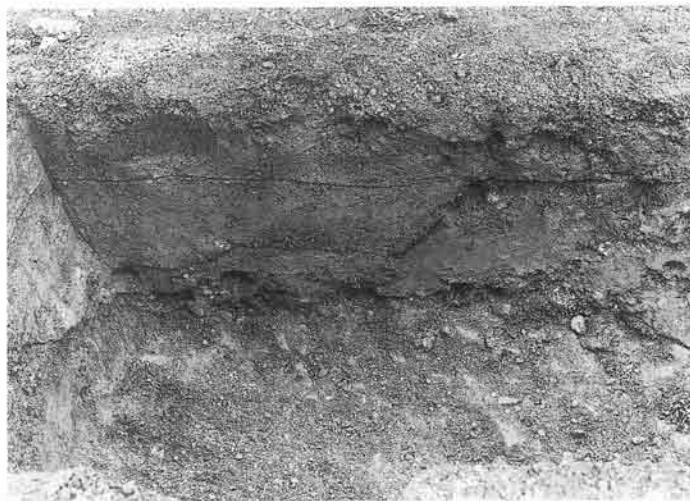
櫛羅遺跡 出土遺物



森脇遺跡 第1トレンチ



森脇遺跡 第2トレンチ



森脇遺跡 第2トレンチ

報告書抄録

ふりがな	かもつば16じはくつちょうさほうこく						
書名	鴨都波16次発掘調査報告						
副書名							
卷次							
シリーズ名	御所市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第27集						
編著者名	阪本晋通／岡田圭司・木許 守						
編集機関	御所市教育委員会						
所在地	〒639-2298 奈良県御所市1-3 TEL 0745-62-3001						
発行年月日	西暦 2002年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
かもつばいせき 鴨都波遺跡	奈良県御所市 だいじみやまえちょう 大字宮前町	29208	34度 27分 24秒	135度 44分 00秒	20001121～ 20001216	約85	個人住宅建築
くじらいせき 櫛羅遺跡	奈良県御所市 だいじくじら 大字櫛羅	29208	34度 27分 46秒	135度 43分 33秒	20010115～ 20010122	約40	個人住宅建築
もりわきいせき 森脇遺跡	奈良県御所市 だいじもりわき 大字森脇	29208	34度 26分 43秒	135度 43分 15秒	20011113		個人住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
鴨都波遺跡	集落	弥生・古墳時代	堅穴住居 土坑 溝 ピット	須恵器 土師器 弥生土器 古式土師器	堅穴住居は古墳時代後期後葉の焼失住居であり、土器の出土状態が良好である。		
櫛羅遺跡	集落	縄文時代		サヌカイト剝片 磁器			
森脇遺跡	集落			須恵器			

奈良県御所市

鴨都波 16次 発掘調査報告

附. 平成12・13年度
個人住宅建築に伴う市内遺跡発掘調査

御所市文化財調査報告書 第27集

平成14年（2002年）3月31日

編集・発行 御所市教育委員会

御所市 1-3

印 刷 煙 笹 田 印 刷 所

御所市今住 16-3